

台 渡 里 6

公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
(台渡里第81次・堀遺跡第29地点)



2011

水戸市教育委員会

台 渡 里 6

公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
(台渡里第 81 次・堀遺跡第 29 地点)

2011

水戸市教育委員会

ごあいさつ

台渡里廃寺跡は、那須茶臼岳を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置しております。古代常陸国那賀郡の官衙跡・寺院跡です。県内でも最古級の寺院跡を含む広大な古代遺跡として県外からも多くの注目を集め、現在その一部は、国史跡として指定されており、恒久的な保存と継続的な活用に向けて検討を進めているところでございます。周辺には国史跡「愛宕山古墳」をはじめ、堀遺跡、西原古墳群、渡里町遺跡など多くの古代遺跡が立地しており、古くから政治・宗教・文化の中心地であったと考えられます。

歴史的文化遺産である文化財は、一度破壊されると二度と原状に復することができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産ではありますが、都市化の様相が強まる中で、特に埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつあります。そこで、本市においては、市民の生活安全・衛生とのバランスを考慮しつつ、文化財の意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたび、当該遺跡内に公共下水道の新設工事が計画されました箇所の周辺につきましては、平成18年度来の発掘調査により、二重区画をもつ郡衙正倉院の存在が明らかとなったことから、条件の整った区域について国の追加指定へ向けた意見具申を行ったところでございます。今回の計画では、十分に協議を重ねた結果、その一部について遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至ったことから、次善の策として発掘調査を実施することとなりました。あわせて、同様に公共下水道の新設工事に伴って発掘調査に至りました堀遺跡についても発掘調査を行い、本書に所収した次第です。

今回の調査により、台渡里廃寺跡では、想定通りに郡衙正倉院の外側区画溝が検出されるとともに、新たに礎石建物跡の存在が明らかとなりました。また堀遺跡では、郡衙の経営を支えたとみられる古代集落跡の一部が確認されました。こうした成果は、古代地域社会の歴史を解明していく新たな一歩を踏み出すきっかけとなることでしょう。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました周辺住民の皆様、並びに関係機関の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成23年7月

水戸市教育委員会教育長 鯨岡 武

例 言

- 1 本書は、水戸市台渡里310号線・法定外道路公共下水道工事に伴う台渡里廃寺跡（台渡里第81次）・堀遺跡（第29地点）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社シン技術コンサルの調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって行った。
- 3 調査概要及び調査組織は下記の通りである。

所在地	台渡里廃寺跡 水戸市渡里町字アラヤ 3054 番 3 地先～同 3055 番 2 地先 堀遺跡 水戸市渡里町字高野台 3317 番 4 及び同 3321 番 3
調査面積	台渡里廃寺跡 34.1㎡ 堀遺跡 20.7㎡
調査期間	平成 23 年 3 月 29 日 から 平成 23 年 4 月 23 日 まで
調査主体	水戸市教育委員会（教育長 鯨岡 武）
調査担当者	川口 武彦（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター主幹）（平成 23 年 3 月 31 日まで） 瀧美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター文化財主事）（平成 23 年 4 月 1 日から）
調査支援	株式会社シン技術コンサル 小川 長導（調査担当） 川村 浩（測量担当）
調査参加者	青木 毅彦・川崎 剛史・高久 照美・高柳 悦子・飛田 邦夫・中崎 道子
事務局	内田 秀泰 教育次長（平成 23 年 3 月 31 日まで） 会沢 俊郎 教育次長（平成 23 年 4 月 1 日から） 中里誠志郎 文化課長 宮沢 賢司 文化課埋蔵文化財センター所長（平成 23 年 3 月 31 日まで） 五上 義隆 文化課副参事兼埋蔵文化財センター所長（平成 23 年 4 月 1 日から） 米川 暢敬 文化課埋蔵文化財センター文化財主事 山戸 祐子 文化課埋蔵文化財センター嘱託員 色川 順子 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員 田中 恭子 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員 金子 千秋 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員（平成 23 年 3 月 31 日まで） 三浦 健太 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員（平成 23 年 3 月 31 日まで） 額賀 大輔 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員（平成 23 年 4 月 1 日から） 鈴木 達也 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員（平成 23 年 4 月 1 日から）

- 4 本書は、瀧美・小川が分担して執筆し、瀧美の助言・指導に基づいて小川が編集した。
- 5 出土遺物及び写真などの記録類は、報告書刊行後一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管する。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表したい（敬称略・順不同）。

文化庁文化財部記念物課，茨城県教育庁文化課，アグリサポートおぎや

凡 例

- 1 本書に記している座標値は、過去の調査との整合性を保つため、便宜的に日本測地系である。挿図のうち、平面図の方位記号は座標北を、土層断面図の水準線高の数値は、海拔標高をそれぞれ示す(単位:m)。
- 2 土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務所・(財)日本色彩研究所色票監修2005年版)に準拠する。
- 3 遺構平面図及び土層断面図の縮尺は、1/20, 1/60, 1/150 とし、各図にスケールを明示した。
- 4 遺構及び土層断面の略称に使用した記号は以下のとおりである
竪穴建物跡:SI 土坑:SK ビット:P 溝跡:SD 井戸跡:SE 掘込地業: SX
※攪乱・本根は「K」を用いた
- 5 遺物実測図の縮尺は、土器類を1/3、瓦・石器を1/4で掲載し、各図にスケールを明示した。
- 6 遺物法量の計測値については、cm及びgで示した。
- 7 遺物番号は、実測図、観察表、写真図版とも共通である。
- 8 挿表中における括弧付き数字については、()内が推定値、[]内が遺存値・現存値を示す。
- 9 引用・参考文献は、一括して本文末に取めた。

本文目次

ごあいさつ

例言・凡例・目次・抄録

I 調査に至る経緯	1
1 調査に至る経緯	1
II 遺跡の周辺環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	3
3 台渡里遺跡群における既往の調査	6
III 台渡里廃寺跡(台渡里第81次)	11
1 調査の方法と経過	11
2 基本土層	11
3 検出された遺構と遺物	13
4 総括	27
IV 堀遺跡(第29地点)	28
1 調査の方法と経過	28
2 基本土層	28
3 検出された遺構と遺物	29
4 総括	34

引用・参考文献

写真図版

図 版 目 次

第 1 図	台渡里廃寺跡・堀遺跡の位置	2	第 14 図	第 1 号井戸跡出土遺物 (4)	20
第 2 図	台渡里遺跡群周辺の遺跡分布地図	4	第 15 図	第 1 号井戸跡出土遺物 (5)	21
第 3 図	調査対象地の位置	11	第 16 図	第 1～5 号土坑	24
第 4 図	基本土層	11	第 17 図	土坑・遺構外出土遺物	25
第 5 図	遺構配置図	12	第 18 図	調査対象地の位置	28
第 6 図	掘込地菓	13	第 19 図	基本土層	28
第 7 図	第 1 号溝跡	14	第 20 図	遺構配置図	29
第 8 図	第 1 号溝跡出土遺物 (1)	15	第 21 図	第 1 号竪穴建物跡	30
第 9 図	第 1 号溝跡出土遺物 (2)	16	第 22 図	第 1 号竪穴建物跡出土遺物	31
第 10 図	第 1 号井戸跡	17	第 23 図	第 1 号掘立柱建物跡	32
第 11 図	第 1 号井戸跡出土遺物 (1)	17	第 24 図	第 1 号掘立柱建物跡出土遺物	32
第 12 図	第 1 号井戸跡出土遺物 (2)	18	第 25 図	遺構外出土遺物	33
第 13 図	第 1 号井戸跡出土遺物 (3)	19			

表 目 次

第 1 表	台渡里遺跡群周辺の遺跡一覧	5	第 12 表	第 1 号井戸跡出土石製品観察表	22
第 2 表	台渡里遺跡群における既往の調査一覧	7	第 13 表	土坑出土軒平瓦観察表	25
第 3 表	第 1 号溝跡出土軒平瓦観察表	16	第 14 表	土坑・遺構外出土瓦観察表	26
第 4 表	第 1 号溝跡出土丸瓦観察表	16	第 15 表	第 81 次調査出土遺物総量	26
第 5 表	第 1 号溝跡出土平瓦観察表	16	第 16 表	第 81 次調査出土瓦計量表	26
第 6 表	第 1 号溝跡出土土器観察表	16	第 17 表	溝跡・ピット観察表	27
第 7 表	第 1 号井戸跡出土軒平瓦観察表	21	第 18 表	第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表	31
第 8 表	第 1 号井戸跡出土軒平瓦観察表	21	第 19 表	第 1 号掘立柱建物跡出土遺物観察表	32
第 9 表	第 1 号井戸跡出土丸瓦観察表	22	第 20 表	遺構外出土遺物観察表	33
第 10 表	第 1 号井戸跡出土平瓦観察表	22	第 21 表	溝跡・土坑・ピット観察表	34
第 11 表	第 1 号井戸跡出土土器観察表	22	第 22 表	第 29 地点出土遺物総量	34

写真図版目次

表	紙 SX01 検出状況 (北西から)		写真図版 3	第 1 号溝跡出土遺物・第 1 号井戸跡出土遺物 (1)	
表	表 紙 SE01 出土軒平瓦		写真図版 4	第 1 号井戸跡出土遺物 (2)	
	台渡里廃寺跡 (台渡里第 81 次)		写真図版 5	第 1 号井戸跡出土遺物 (3)	
写真図版 1	調査区完掘全景 (南から)		写真図版 6	第 1 号井戸跡出土遺物 (4)・土坑出土遺物・遺構外出土遺物	
	基本土層 (東から)				
	SX01 検出状況 (南西から)		堀遺跡 (第 29 地点)		
	SX01 土層断面 (北西から)		写真図版 7	1 区完掘全景 (南西から)	
	SX01 土層断面 (南から)			2 区完掘全景 (北東から)	
写真図版 2	SD01 土層断面 (南東から)			3 区完掘全景 (南西から)	
	SE01 完掘状況 (東から)			基本土層 (北西から)	
	SE01 軒平瓦出土状況 (南東から)			SI01 床面完掘 (南から)	
	SK01 完掘状況 (南から)			SI01 カマド土層断面 (南から)	
	SK02 骨出土状況 (西から)			SI01 №1 遺物出土状況 (南西から)	
	SK03 完掘状況 (西から)			SB01P1 土層断面 (東から)	
	SK04 完掘状況 (東から)		写真図版 8	第 1 号竪穴建物跡出土遺物・第 1 号掘立柱建物跡出土遺物・遺構外出土遺物	
	SK05 完掘状況 (北西から)				

報告書抄録

ふりがな	だいわたりろく							
書名	台渡里6							
副書名	公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里第81次・堀道跡第29地点)							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第44集							
編集者名	渥美賢吾・小川長導							
著者名	渥美賢吾・小川長導							
編集・発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111(代)					
発行年月日	2011(平成23)年7月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
台渡里廃寺跡 (台渡里第81次)	水戸市渡里町字アラヤ 3054番3地先～同3055番 2地先	08201	098	36° 24' 30"	140° 25' 55"	2011/03/29 ～ 2011/04/13	34.1	公共下水道新設工事
堀道跡 (第29地点)	水戸市渡里町字高野台 3317番4及び同3321番3	08201	064	36° 24' 31"	140° 25' 31"	2011/04/14 ～ 2011/04/23	20.7	公共下水道新設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
台渡里廃寺跡 (台渡里第81次)	寺院跡 官衙跡	奈良・平安	掘込地業(礎石建物跡)1 溝跡3 土坑5 ピット2		瓦、土師器、 須恵器、灰輪陶器、 砥石、骨		那賀郡衙の正倉院を区画する区画 施設の外溝が検出され、東辺と同様 に、再掘削されていることを確認し た。また、区画外に礎石建物跡とみ られる掘込地業が検出され、注目さ れる。	
		中世	井戸跡1		かわらけ			
堀道跡 (第29地点)	集落跡	奈良・平安	竪穴建物跡1 掘立柱建物跡1 溝跡1 土坑1 ピット10		土師器、須恵器		8世紀後半から9世紀中頃の竪穴 建物跡や掘立柱建物跡を確認した。	

※北緯・東経は世界測地系

I 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯

水戸市長加藤浩一（下水道部下水道整備課）から、文化財保護法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が、水戸市教育委員会（以下、市教委という。）教育長あて2通提出された。ひとつは、平成22年5月13日付下整第104号にて、市道渡里310号線における公共下水道新設工事に伴うもので、もうひとつは、同日付下整第105号にて、法定外道路（農道）における公共下水道新設工事に伴うものである。

市道渡里310号線（渡里町字高野台3317番4及び同3321番3）は周知の埋蔵文化財包蔵地「堀遺跡」（遺跡番号201-064）に、法定外道路（渡里町字アラヤ3054番3地先～同3055番2地先）は周知の埋蔵文化財包蔵地「台渡里廃寺跡」（遺跡番号201-098）に、それぞれ該当している。とくに「台渡里廃寺跡」内の計画路線の周辺は、平成18年度末、市教委が主体となって発掘調査を進め、明らかとした二重区画をもつ郡正正合院の範囲であり、ちょうど史跡「台渡里廃寺跡」の追加指定範囲とすべく、準備を進めていたところであった。これらの調査により、計画路線が正合院の外側区画溝を横断することが推定できた。文化課と下水道整備課とで数度にわたり協議を行ったが、工事の計画変更を行ったとしても、その一部に影響があることは避けられないことが判明したことから、汚水管理設深度をできるだけ浅くし、重要遺構への損壊を最小限に止めることとして、部分的な本発掘調査が必要であるとの見通しを得た。

堀遺跡における市道渡里310号線全体と、台渡里廃寺跡における法定外道路のうち計画変更を経てもなお影響の避けられない箇所については、「埋蔵文化財として扱う範囲及び開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基準」（平成12年3月3日付文第162号）の「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」と照合・検討した結果、原則Ⅰ「工事により埋蔵文化財が削掘され、破壊される場合」もしくは原則Ⅱ（1）「掘削は埋蔵文化財に直接及ばないが、工事により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのある場合」に該当するとともに、発掘調査を行う上での安全確保のための一定条件を満たす見込みがあることから、工事前本発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる必要があるとの意見を付し、茨城県教育委員会（以下、県教委という。）に進達した。

県教委教育長からは、平成22年7月5日付文第612号及び平成22年8月16日付文第884号にて、それぞれ工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響がある部分について、工事前本発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨勧告があった。

これを受けて、市教委は、調査対象から沿線に面する住宅出入口及び交差点等を除いた上で、台渡里廃寺跡を第81次調査、堀遺跡を第29地点と位置づけ、前者において34.1㎡、後者において20.7㎡を対象とし、平成23年3月29日から平成23年4月23日の期間をもって本発掘調査を実施した。

なお、台渡里第81次調査区の南側において発見された礎石建物跡については、現状保存が最良であることから、現地において再度下水道整備課と協議を重ねた結果、施工段階において、埋設管を50cm程度西側へ移動させることで、遺構に直接的に影響を与えないよう配慮することで調整し、礎石建物跡の現状保存を可能せしめたことを付記しておく。

（渥美）

II 遺跡の周辺環境

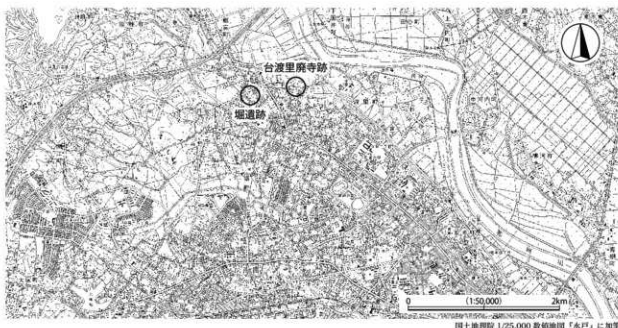
1 地理的環境

水戸市は、日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。地域の北部には、八溝山地を横切り、鷲子山塊と萬足山塊とを南北に分ち、西から東へ流れる那珂川とその支流により沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へと続き、市域西部を構成している。

その下流域右岸の大半を水戸市域とする那珂川は、栃木県的那須連山を源流として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地の間を太平洋へ向かって流れ出る。この那珂川が存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが、水上交通により結ばれることから、歴史的に水戸市域が交通の要衝地となるが多かった。

台渡里廃寺跡及び堀遺跡は、いわゆる上市台地の北端に位置する標高約30m程度の台地平坦面に立地する。台地に北面して田野川が西から東に流れ、台地の北東縁辺に沿うように流れる那珂川に合流する。この合流地点は、台地の尽きるところにあり、那珂川が大きく蛇行し、南東方向の鹿島灘に向かって流れていくのである。合流地点より東にやや流れが緩やかになる地点があり、近世には渡し場があったと伝えられ、「舟渡」の地名を遺す。古代においては、この延長線上に東海道常陸路が推定されており、同様に渡河点があったと推測される。

台地縁辺部から斜面にかけては、風致地区として指定されており、豊かな緑を遺す。斜面を下りきったところには、各所で湧水点が確認されている。『常陸国風土記』那賀郡条では、郡家近傍に「泉に緑りて居める村落の婦女 夏の月に会集ひて布を洗ひ 晒し乾せり」とする場所が存在するとあるが、これまでの調査成果を勘案すれば、那賀郡家は堀遺跡に隣接する台渡里遺跡周辺と推定されることから、これら湧水点のいずれかであろう。『萬葉集』に詠われた「三栗の なかに向へる 曝井の 絶えず通はむ そこに妻もが」(巻九-1745)の曝井が、常陸国那賀郡家の近傍だとされるのもこのためである。現在は愛宕町滝坂に推定されており、渡里町に連綿と続く古代遺跡群と那珂川流域最大規模の前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」との間に位置する。(麗美)



第1図 台渡里廃寺跡・堀遺跡の位置

2 歴史的環境

台渡里廃寺跡 (098) 及び堀遺跡 (064) は、古代集落跡をはじめとして、縄文時代から近世にかけて断続的に営まれてきた複合遺跡である。奈良・平安時代がしばしば注視されるのは、古代官衙・寺院遺跡として名高い国指定史跡「台渡里廃寺跡」に隣接する遺跡で、早くからその関連集落であるとの指摘がなされてきたからに他ならない。昭和 20 年代頃までは、この一帯は山林と畑地が多く、土地利用が緩慢としていたが、昭和 40 年代後半から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。今回の調査では、ほとんどの遺構・遺物が奈良・平安時代であったことから、以下では、とくに奈良・平安時代の周辺遺跡について概観する。

台渡里廃寺跡長者山地区については、従来から炭化米の出土と、礎石建物跡が確認されていることから (高井 1964, 瓦吹 1991), 那賀郡衛正倉院と推定された (瓦吹 1991, 黒澤 1998)。近年行っている市教委の確認調査により、新たに 9 棟の礎石建物跡と四方を台形状に囲む区画溝が確認され、正倉院であることが確定的になった。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衛政庁院や河内駅家とする見解もあったが (瓦吹 1991, 外山 1993), これまでの調査により、寺院伽藍地内及びその周囲から陶製相輪の一部や塑像片、須臾器高形香炉等の仏教関連遺物の出土をみたことから、いわゆる郡衛周辺寺院であると推定されるに至った (川口・小松崎ほか 2005)。創建年代は 7 世紀後半に遡ると考えられる。

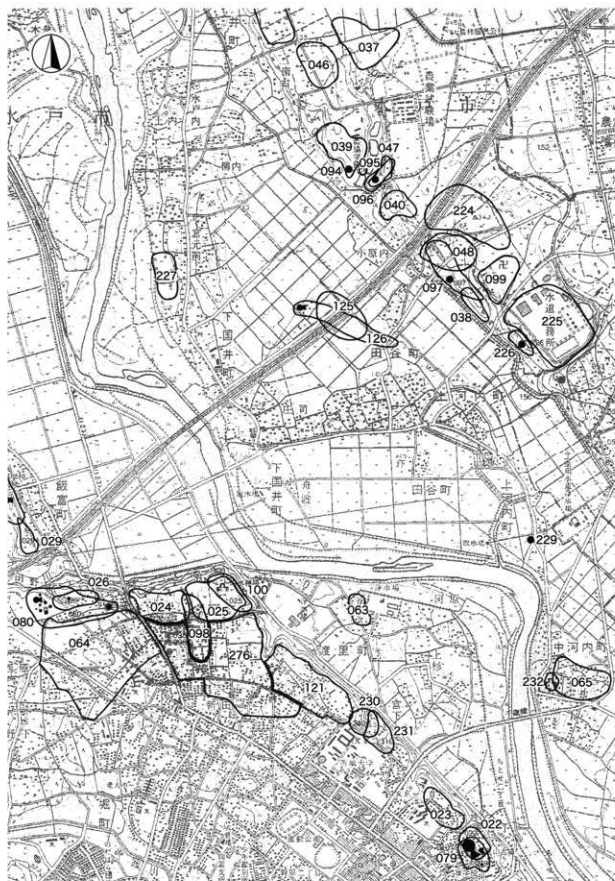
南方地区については、塔跡基壇内部から内黒土器の破片が出土したことから、9 世紀後半に造営開始された寺院跡であることが判明した。観音堂山伽藍が 9 世紀に火災で廃絶していることに加え、南方地区の伽藍区画溝の掘削が途中で廃絶されていることから、観音堂山伽藍焼亡後に南方地区において再建が開始されたが、何らかの事情により途絶した可能性が高い (川口・小松崎ほか 2005)。

二つの寺院伽藍の東方の台渡里遺跡 (276) では、竪穴建物跡や溝跡から湖西産や上野系など搬入品とみられる須臾器や東北地方の栗岡式の影響を受けた土師器などを含む 7 世紀後半～8 世紀前半の土器群が集中的に出土した。一部は、寺院区画溝に接して鍛冶工房跡等とともに確認されたことから、観音堂山地区初期寺院の造営に関わったものとみられる (川口・間口ほか 2007)。また、これら 7 世紀後半から 8 世紀前半にかけての遺構群に近接して、8 世紀中葉以降に帰属する 3×3 間の布掘り総柱式掘立柱建物跡と軸を同じくする区画溝の発見があった。溝からは「郡別」銘墨書土師器や台坪が出土し、官衙ブロックの一部である可能性が高い (佐々木・林ほか 2008)。これら 8 世紀中葉以降の遺構群の軸が真北を示す傾向にあるのに対し、これらに先行するとみられる遺構群の軸は、やや北西に振れる傾向にある。8 世紀前半代のいずれかを画期と考えたい。

同じく台渡里遺跡でも寺院伽藍の南東方では、総地業の礎石建物跡 1 棟とそれを区画する溝 1 条が検出され、区画溝の覆土上層からは炭化米がまとまって出土した (小川・大淵ほか 2006)。隣接する竪穴建物跡からは「備所」銘墨書をもつ 8 世紀後半の須臾器や台坪が出土した。狭小な調査区ゆえに拙速な判断は控えたいが、炭化米や礎石建物跡の存在から類推するならば、租税等を備蓄しておくための別個の官衙ブロックの存在をうかがわせる。

寺院・官衙遺跡の外縁部にあたるアラヤ遺跡 (024) 第 1 地点では、7 世紀末～8 世紀初頭の工房跡等から刀子や砥石などが一定量出土しており、寺院や官衙の造営に関わっていた可能性が高い。また、台渡里遺跡を中心に堀遺跡と対になる位置に、渡里町遺跡 (121) が所在する。第 5 地点では、7 世紀末から 9 世紀中葉までの竪穴建物跡が検出された。灰輪陶器と瓦が出土した点において、官衙隣接集落としての特徴をよく表している (佐々木・林ほか 2008)。

那珂川左岸では、砂川遺跡 (224) から竪穴建物跡で構成される古代集落が確認された。鉄製品のほかに土製紡錘車などの生産用具が出土する。また、井戸跡から曲物、飾、高台付盤などの木製品の出土をみた (渡辺 1981)。また、白石遺跡 (225) からは、古代掘立柱建物跡、建物基壇が検出され、官衙関連遺跡として注目された。とくに、8 世紀前半に帰属するとみられる桁行 36 間×梁間 2 間の規模をもつ掘立柱建物跡は、並行する区画溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。(櫻村 1993a)。白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡 (099) では、台渡里廃寺跡長者山地区と同様の瓦の出土が多数みられ、3 棟の礎石建物跡の存在が報告されている (伊東 1975)。本遺跡を新置の河内駅家跡とするならば (黒澤 1998)、白石遺跡 II 区 2 号掘立柱建物跡は、駅馬を繋いでおくための



第2図 台渡里遺跡群周辺の遺跡分布地図

〔東城台遺跡地図〕1/25,000より

馬房や厩舎などの施設であろうか(櫻村 1993b)。なお、この建物跡を馬房とする見解については、『延喜式』には駅馬数が2疋とあり、養老2年(718)の石城国設置に伴って駅馬数10疋が置かれたと仮定しても、建物の規模とには隔たりがあることから、近年では、騎兵のための馬房としてみることで駅家の軍事的側面を強調した見解が示されている(木本 2008)。

(瀧美)

第1表 台渡里遺跡群周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、石押・石鏃・土偶、弥生土器(後)、土器部(古)、須恵器(古)	
23	文京丁日置跡	集落跡	縄文土器(早～後)、石押・石鏃・土偶、弥生土器(後)、土器部(古南)、須恵器	
24	アサナ遺跡	集落跡	尖頭部(先)、縄文土器(早～晩)、石押・石鏃・土偶、土器部(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	S27年、H1年、H18年度調査
25	長山遺跡	集落跡	縄文土器(早～晩)、弥生土器(後)、土器部(古・奈・平)	
26	内山遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、土器部(奈・平)、須恵器(奈・平)	
27	宍戸屋遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土器部(古南)	
29	阿川遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、土器部(古)、土器部(奈・平)	
38	楚八遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土器部(古南・後)	
39	藤丸山遺跡	集落跡	縄文土器(前)、弥生土器(後)、土器部(古南・後)	
40	平道遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)、石鏃・土偶、弥生土器(後)、土器部(古)、須恵器	
46	軍民坂遺跡	集落跡	埴器(先)、縄文土器(前～後)、土器片鏃・石製品、弥生土器(後)、土器部(奈・平)、須恵器(奈・平)	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土器部(古)、須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、弥生土器(後)、土器部(古)、土器部(奈・平)	
63	坪草平遺跡	集落跡	土器部(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)	
64	船遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土器部(古南・奈・平)、須恵器(奈・平)、灰輪陶器(奈良・平安)、鉄鍬柄・砥石・鉄製品(鏃・鏃・刀子・釘)、丸・内耳土器(中)、土器部(中)、土器部(中)、奈・奈・奈(中)、器片鏃(中)、石立、丸耳土器(近)、磁器(近)	H5年、H6年度調査
65	中野内遺跡	集落跡	古墳(前)、土器部(奈・平)	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀(古)	前方後円墳1(2)、円墳1(2)
80	西原古墳群	古墳群	土器部(古)、円筒埴輪(古)、須恵器・勾玉・管玉・丸玉・雷玉・銅鏡・鉄鍬(古)	H17年、H18年度調査、度前方後円墳1、円墳8(11)
94	藤丸山古墳群	古墳群		円墳1(2)
95	藤丸山古墳群	古墳群	土器部(古)、須恵器(古)、水晶製切子玉・ガラス製小玉(古)	前方後円墳0(4)?
96	富士山古墳群	古墳群	土器部(古)、円筒埴輪・人物埴輪(古)	前方後円墳1(7)、円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀(古)	前方後円墳1、円墳2(4)
98	台渡里庵寺跡	寺院跡/官衙跡	ナイフ形石鏃、男女食器有樋尖頭部、調子(先)、縄文土器(前・後～晩)、石鏃、弥生土器(後)、土器部(奈・平)、須恵器(奈・平)、土器部(奈・平)、丸瓦・軒瓦・瓦葺平瓦・瓦葺平瓦・陶切瓦・文字瓦・瓦葺・陶製相輪・金箔製品・鉄製品(釘・鍬)、青銅製品・鍬・柄杓、カワラケ(中)、内耳土器(中)	S14～S19年、S46～S49年、H6年、H9～H10、H12～H18年度調査
99	田行庵寺跡	寺院跡/官衙跡	土器部(奈・平)、須恵器(奈・平)、平瓦・丸瓦・軒瓦、軒平瓦・文字瓦(奈・平)	
100	長者山城跡	城館跡		H18年度調査、土塁と堀が良好な状態で遺存
121	渡野町遺跡	集落跡	縄文土器(早・中・後)、土器部(古・奈・平)、須恵器(奈・平)、灰輪陶器(奈・平)	H15年、H16年度調査
125	屋敷遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、弥生土器(後)、土器部(古南・後)	
126	塚宮古墳群	古墳群		前方後円墳0(1)、円墳0(2)、濠溝
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、土器部(奈・平)、須恵器(奈・平)、石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦(奈・平)	
225	白石遺跡	城館跡/集落跡	内庫伏石部(先)、階層(先)、尖頭部(草部)、有舌尖頭部(草部)、石鏃(草部)、縄文土器(中)、弥生土器(後)、土器部(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)、内耳土器(中)、陶器(中)、磁器(中)	H2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元遺跡	集落跡	土器部(古南)	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳0(1)、濠溝
230	笠原神井古墳	古墳	縄文土器(後)、土器部(古)、陶器	円墳1(3)
231	文京丁日置跡	集落跡	弥生土器(後)、土器部(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
232	中野内遺跡	城館跡		
276	台渡里遺跡	官衙跡/集落跡	縄文土器(晩)、土器部(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)、土器部(奈・平)、土器部(奈・平)、軒平瓦・瓦葺平瓦(古)、鉄製品(古・砥石(古)、内耳土器(中)、陶器(近)、磁器(近)、銅鏡(近)、銅製器(近)、砥石(近)	H6年、H8年、H14～H22年度調査

(井上・藤沼・仁平・根本 1999)に追加

3 台渡里遺跡群における既往の調査

ここでは、台渡里廃寺跡及び堀遺跡を中心に、当地に立地する古代遺跡群に対する調査成果を一体的に概略することで、古代の官衙・寺院遺跡の様相を中心についてふりかえっておきたい。

1 寺院と都衛正倉院の調査

台渡里廃寺跡の調査研究は、高井梯三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする（高井1964）。これを受けて、昭和20年にその一部が茨城県指定史跡とされた。

長者山地区については、従来から炭化米の出土が報告され、礎石建物跡が確認されていることから（高井1964、瓦吹1991）、那賀郡衛正倉院と推定された（瓦吹1991、黒澤1998）。近年行っている市教委の範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と四方を台形状に囲む区画溝が確認され、正倉院であることが確定的になった。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衛政庁院や河内駅家とする見解もあったが（瓦吹1991、外山1993）、市教委が行った範囲確認調査により、寺院建築とみられる礎石建物跡に伴って、陶製相輪の一部や壺像片、須恵器高坏形香炉等の仏教関連遺物の出土をみたことから、いわゆる都衛周辺寺院であると推定されるに至った。そして、その創建年代は7世紀後半に遡ることが明らかとなった（川口・小松崎ほか2005）。出土瓦には、「吉(土田)」、「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志□」、「年足」等寺院造営に関与した那賀郡の郷名や人名が記されたもの、相輪の一部が描かれたものや「佛」銘をもつものなどが豊富に確認された。

南方地区については、早くから寺院と考えられてきたが（高井1964、瓦吹1991、黒澤1998）、市教委が行った範囲確認調査により、塔跡基壇の内部よりいわゆる内黒土器の坏破片が出土したことから、9世紀後半に造営された寺院跡であることが判明した。観音堂山地区の寺院が9世紀には火災で廃絶していることに加え、南方地区の伽藍区画と思しき溝の掘削が途中で廃絶されていることから、観音堂山伽藍焼亡後に南方地区において再建が開始されたが、造営は何らかの事情により中断した可能性が高い（川口・小松崎ほか2005）。なお、平成17年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

2 堀遺跡における既往の調査

堀遺跡における発掘調査は、いわゆる試掘・確認調査を含めて現在のところ計28地点を調査している。なかには個人住宅建設に伴う狭小で零細な調査や、現在室内整理作業中の調査も含んでいるので、ここで網羅的に記すのは適切でない。そこで、これまでの調査において注目されるべき調査について概要をまとめておく。

遺構として明確に確認されたもので最も古く考えられるのは、第2地点において確認された竪穴建物跡1軒である。いわゆる十王台式の範疇となる弥生時代後期の壺と土師器壺及び埴が出土した（井上・千葉ほか1995）。これは共伴である可能性が高いことから、古墳時代前期初頭に帰属するものと考えられる。

第2地点において最も主体をなすのは、竪穴建物跡・掘立柱建物跡から構成される大規模な古代集落跡である。最も隆盛するのは、8世紀後半から9世紀にかけてである。特筆されるのは、刀子・鎌・鋸・釣針・釘・錠などの鉄製品や須恵器壺Gなど特殊な器種の土器の出土である。土坑から出土した人面黒書の土師器小甕とあわせて、この集落の特異性をよく表している（井上・千葉ほか1995）。なお、5号掘立柱建物跡は長倉風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性があることから（櫻村2005）、当該集落は、那賀郡衛の造営や修造などに関わった計画村落である可能性が指摘できよう。

第2地点の周辺では、第9・10・11の各地点において、竪穴建物跡を主体として数多くの奈良・平安時代の遺構が確認されており、古代集落跡としての規模の大きさを知ることができる。

遺跡の西端に位置する第1地点では、9世紀代の竪穴建物跡とともに、規模の異なる3棟の掘立柱掘立柱建物跡が検出されており（伊藤1995）、当該集落の規模の大きさをよく表す。なお、第1地点の北方にあたる第6地点では、廂・孫廂をもつ掘立柱建物跡が調査されており、これはいわゆる古代村落内の仏堂に該当する可能性がある。古代において村落内の仏堂は、しばしば竪穴建物跡や掘立柱建物跡などで構成される生活空間の外縁部に位置することから、現在の包蔵地範囲がそのまま古代集落跡の範囲として理解されるだろう。

その他、いずれの地点も、多くは8世紀後半から9世紀にかけての遺構・遺物がみられ、上記の調査成果を補強する内容ではあるものの、訂正すべき内容ではない。現在隣接する官衙・寺院遺跡との関連性に注意しつつ、鋭意整理・検討の作業を進めているところである。(渥美)

第2表 台渡里遺跡群における既往の調査一覧

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査(支援)機関	面積(m ²)	文献等
1	1939	庵寺跡／ 観音堂山地区 ・南方地区	渡里町字アラヤ前 2973-1・2・3, 2974, 2975, 字ヤジカ 2909-1	学術調査	高井彬三郎	—	—	高井 1964
2	1941	庵寺跡／ 観音堂山地区 ・南方地区	渡里町字アラヤ前 2973-1・2・3, 2974, 2975, 字ヤジカ 2909-1	学術調査	高井彬三郎	—	—	
3	1943	庵寺跡／ 観音堂山地区 官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3118, 3120, 3121, 3130, 3134, 字アラヤ前 2973-1, 2973-2, 2974, 2975	学術調査	高井彬三郎	—	—	
4	1971.03	庵寺跡／ 南方地区	渡里町字ヤジカ 2909-1	史跡保存に向けた範囲確認	伊東重敏	市教委 (確認調査)	—	瓦吹 1991
5	1971.04 ～ 1971.05	庵寺跡／ 南方地区	渡里町字ヤジカ 2909-1 ほか	史跡保存に向けた範囲確認	伊東重敏	市教委 (確認調査)	—	
6	1972.03	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2962-1, 2980-1, 2983-1	史跡保存に向けた範囲確認	伊東重敏	市教委 (確認調査)	—	
7	1973.03	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3069-1, 3069-2, 3070	史跡保存に向けた範囲確認	伊東重敏	市教委 (確認調査)	—	
—	1989.12.08 ～ 1990.02.17	アラヤ遺跡 (第1地点)	渡里町字アラヤ 3201-1	デパート・サービスセンター建設	井上義安	発掘調査会 (本調査)	3,500	調査会 1990 「アラヤ遺跡」
8	1994.09.20 ～ 1994.11.30	庵寺跡／ 南方地区	渡里町字アラヤ前 2977 ほか	都市計画道路 3・6・30号線敷設	井上義安	遺跡調査会 (本調査)	1,570.5	調査会 1995 「台渡里庵寺跡」
	1996.06.27 ～ 1996.07.06	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字宿屋敷 3017 ほか	都市計画道路 3・6・30号線敷設	井上義安	遺跡調査会 (本調査)	1,883	
9	1996.06.27 ～ 1996.07.06	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字宿屋敷 3017-1	共同住宅建設	井上義安	(試掘調査)	465	市教委 1996 「水戸市台渡里遺跡」
10	1997.07.11	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2977-1	共同住宅建設	井上義安	(試掘調査)	200	
11	1998.01.23	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2983-1	共同住宅建設	井上義安	(試掘調査)	70	
12	2001.03.27	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2967-1	共同住宅建設	川崎純徳	市教委 (試掘調査)	140	市教委 2004 「台渡里庵寺跡」
13	2001.05.22	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2970	共同住宅建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	110	市教委 2004 「台渡里庵寺跡」
			渡里町字アラヤ前 2967-1	共同住宅建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	62.1	
14	2001.01.23 ～ 2002.03.08	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2970	共同住宅建設	豊沼香未由	発掘 (本調査)	402	市教委 2004 「台渡里庵寺跡」
15	2002.07.12	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町 2987-18	個人住宅兼動物病院 店舗建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	21.6	
16	2002.08.01 ～ 2002.12.03	庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ前 2973-1 ほか	重要遺跡範囲確認	川口武彦	市教委 (確認調査)	433	市教委 2005 「第1集」
17	2003.06.30 ～ 2003.07.04	庵寺跡／ 南方地区 官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字宿屋敷 2876, 2877-1, 2877-2, 2878, 2879-1, 2881-1, 字宿屋敷 2885, 2886-9	大型店舗建設	川口武彦 小松純博一	市教委 (試掘調査)	366	市教委 2005 「第1集」
18	2003.07.22 ～ 2003.10.27	庵寺跡／ 観音堂山地区 南方地区	渡里町字アラヤ前 2973-1 ほか	重要遺跡範囲確認	川口武彦 小松純博一	市教委 (確認調査)	894	市教委 2005 「第1集」
			渡里町 2979-1	重要遺跡範囲確認	川口武彦 小松純博一	市教委 (確認調査)	1,600	
19	2004.05.11 ～ 2005.01.21	庵寺跡／ 南方地区 庵寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字ヤジカ 2909-1 ほか	重要遺跡範囲確認	川口武彦 新田清貴	市教委 (確認調査)	1,530	市教委 2005 「第1集」
			渡里町字アラヤ前 2973-1 ほか	重要遺跡範囲確認	川口武彦 新田清貴	市教委 (確認調査)	280	
20	2004.10.04 2004.11.04 ～ 2004.11.05	庵寺跡／ 南方地区	渡里町字ヤジカ 2913-8, 2915-1の一部分, 2935-1の一部分, 2935-2の一部分, 2934の一部分	共同住宅建設	川口武彦 新田清貴	市教委 (試掘調査)	45	市教委 2005 「第1集」

II 遺跡の周辺環境

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査(支援)機関	面積(m ²)	文献等
21	2004.12.21 ～ 2004.12.22	官衙遺跡/ 南原原地区	既筆町字南原 2836-2, 2836-7	宅地造成	川口武彦 新川清貴	市教委 (試掘調査)	158	
22	2005.01.22 ～ 2005.01.23	官衙遺跡/ 東南方 官衙地区	既筆町 2830-1, 2834-1, 2832-5	共同住宅建設	川口武彦 新川清貴	市教委 (試掘調査)	85.5	市教委 2006 「第 5 集」
23	2005.03.14 ～ 2005.04.15	徳寺跡/ 南方地区	既筆町字アラヤ 2984-2A, 字アラヤ前 2982-1A、字 ジジカ 2900-1A ほか	市道常盤 17 号線改 良工事	土生朗治	山武考古学研究所 (本調査)	297	市教委 2005 「第 2 集」
24	2005.04.27 ～ 2005.05.23	官衙遺跡/ 南原原地区	既筆町字南原 2830-1 ほか	集合住宅建設築	大瀧淳志	日考研究会 (本調査)	244	市教委 2006 「第 5 集」
25	2005.10.17 ～ 2005.11.15	徳寺跡/ 観音堂山地区	既筆町字アラヤ前 2969- 2, 2970-1-2-3, 2984-1, 2986-1, 2998-3-5-6-7	市道常盤 17 号線改 良工事	大橋 生 林 邦夫	東京執筆研究所 (本調査) 市教委 (立会調査)	129	市教委 2006 「第 4 集」
26-①	2005.08.24 ～ 2005.10.07 官衙遺跡/ 2005.12.13 ～ 2005.12.28	徳寺跡/ 南方地区 官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町字南原 2874-1 ほか 7 筆	商業施設建設	川口武彦 新川清貴	市教委 (確認調査)	1636.5	市教委 2007 「第 11 集」
26-②	2006.12.04	徳寺跡/ 南方地区 官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町字南原 2874-1 ほか 7 筆	商業施設建設	関口慶久	市教委 (試掘調査)	20	市教委 2007 「第 11 集」
27	2005.11.01	官衙遺跡/ 宿屋敷北地区 (長者山城跡第 1 地点)	既筆町字長者山 3154-9・ 55	個人住宅建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	2	市教委 2007 「第 11 集」
28	2006.04.24 ～ 2006.04.25	官衙遺跡/ 宿屋敷北地区 (長者山城跡第 2 地点)	既筆町字アラヤ 3044-1 番 地ほか	個人住宅建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	259.75	
29	2006.05.25 ～ 2006.10.03	官衙遺跡/ 宿屋敷北地区 (長者山城跡第 2 地点)	既筆町字アラヤ 3044-1 番 地ほか	個人住宅建設	川口武彦 関口慶久	市教委 (発掘調査)	1,058	
30	2006.10.03 ～ 2007.02.07	官衙遺跡/ 長者山地区	既筆町字長者山 3119 番地 ほか	重要遺跡河川確認	川口武彦 新川清貴	市教委 (確認調査)	386.77	市教委 2009 「第 21 集」
31	2006.11.29	官衙遺跡/ 南原原地区	既筆町字南原 2618	個人住宅建設	川口武彦 新川清貴	市教委 (試掘調査)	12.6	市教委 2009 「第 22 集」
32	2007.01.31	官衙遺跡/ 南原原地区	既筆町字熊久保 2771-1 番 地当	宅地造成	川口武彦 新川清貴	市教委 (試掘調査)	30.4	市教委 2009 「第 22 集」
33	2007.01.22 ～ 2007.02.21 官衙遺跡/ 2006.01.27 ～ 2006.01.28	官衙遺跡/ 長者山地区 (アラヤ遺跡第 2 地点)	既筆町字アラヤ 3061-4 地 先	市道常盤 10 号線改 良工事	大橋 生 林 邦夫	東京執筆研究所 (本調査)	244	市教委 2007 「第 12 集」
				市道常盤 10 号線改 良工事	新川清貴 関口慶久	市教委 (立会調査)	—	市教委 2007 「第 12 集」
34	2007.04.04 ～ 2007.06.18	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町字宿屋敷 3028-8	個人住宅建設	川口武彦 梶美賢吾 木本孝嗣	市教委 (発掘調査)	58.22	市教委 2010 「第 35 集」
35	2007.05.27 ～ 2007.05.28	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 2812-1 ～ 3011	常盤 222 号線公共下 水道新設	新川清貴	市教委 (試掘調査)	16.5	市教委 2010 「第 35 集」
36	2007.08.19	徳寺跡/ 観音堂山地区 官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町アラヤ前 2967-1 既筆町宿屋敷 3017-1	重要遺跡河川確認	西村 謙 西口知彦 金田明夫 木本孝嗣 梶美賢吾	市教委 奈良学 (レーザー調査)	—	
37	2007.10.29	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町字宿屋敷 3028-6	土地改良工事	木本孝嗣	市教委 (確認調査)	10	
38	2007.11.12 ～ 2008.02.12	官衙遺跡/ 長者山地区	既筆町字アラヤ 3088-2 地 先	重要遺跡河川確認	梶美賢吾 木本孝嗣	市教委 (確認調査)	420	市教委 2011 「第 37 集」
39	2007.11.19 ～ 2008.01.19	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 2812-1 地先～ 3011 地先	常盤 222 号線公共下 水道新設	大橋 生 市瀬俊一	東京執筆研究所 (本調査)	226	市教委 2008 「第 15 集」
40	2008.03.19	官衙遺跡/ 南原原地区	既筆町字熊久保 2771-12 ほか	個人住宅建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	24.71	市教委 2010 「第 35 集」
41	2008.04.30 ～ 2008.06.04	官衙遺跡/ 南原原地区	既筆町字熊久保 2771-12	個人住宅建設	川口武彦 色川暢子	市教委 (本調査)	90.22	

調査 年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査(支援) 機関	面積 (㎡)	文献等
42	2008.05.19 ～ 2008.05.23	官街遺跡/ 長者山地区	既筆町 3078-2, 3082-1, 3090-7, 3099-1, 3099- 4, 3095-3, 3145-1, 3145-2, 3146	重要遺跡埋蔵確認	川口武彦 西村 謙 山口和昭 金田明大 木本孝樹 三井 猛	市教委 学文研 (レーゾー調査)	7,700	市教委 2011 「第 37 集」
43	2008.07.10	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 3069-1	個人住宅建設	星美賢吾	市教委 (試掘調査)	58.3	
44-①	2008.08.24 ～ 2008.09.13	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町字宿原 2839-1 番地	学術調査	田中 勲 佐藤祐香	茨城大学考 古学研究室	109	
44-②	2009.08.01 ～ 2009.09.17	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町字宿原 2839-1	学術調査	田中 勲 佐藤祐香	茨城大学考 古学研究室	—	
45-①	2008.07.22	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町 2491-21 地先～ 2537-3 地先	道路 33 号線道路改良 工事	星美賢吾 関川慶久	市教委 (立会調査)	—	
45-②	2009.06.03	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町 2491-21 地先～ 2537-3 地先	道路 33 号線道路改良 工事	星美賢吾 米田暢敏	市教委 (立会調査)	—	
46	2008.08.21 ～ 2008.08.26	官街遺跡/ 宿屋敷北地区 (長者山遺跡第 3 地点)	既筆町字長者山 3151-4, 3151-6	個人住宅解体	川口武彦	市教委 (確認調査)	90.75	
47	2008.10.09	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町字宿原敷 2987-4	共同住宅建設	星美賢吾	市教委 (試掘調査)	26	
48	2008.10.21 ～ 2009.03.27	官街遺跡/ 長者山地区	既筆町字長者山 3147 14-0	重要遺跡埋蔵確認	川口武彦	市教委 (範囲確認)	530	市教委 2011 「第 37 集」
49	2008.10.31	官街遺跡/ 長者山地区	既筆町字長者山 3058-3	個人住宅建設	星美賢吾	市教委 (試掘調査)	8.24	
50	2008.12.03	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 3001-3	個人住宅解体	川口武彦	市教委 (試掘調査)	11.54	
51	2009.04.06 ～ 2009.05.16	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町字宿原 2669 地先～ 2775-2 地先	道路 283 号線公底下 水道新設	星美賢吾	東京航業研究所 (本調査)	98.5	市教委 2009 「第 30 集」
52	2009.04.22	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町字念弘久保 2538-1	個人住宅建設	星美賢吾	市教委 (試掘調査)	6	
53	2009.07.13 ～ 2009.07.15	官街遺跡/ 宿屋敷地区・ 既筆町遺跡 第 11 地点 (1 次)	既筆町 2819-1 14-0	集合住宅建設	米田暢敏	市教委 (試掘調査)	90	
54	2009.07.08 ～ 2009.08.12	官街遺跡/ 長者山地区	既筆町字長者山 3119 14-0	重要遺跡埋蔵確認	川口武彦	市教委 学文研 (範囲確認)	150	市教委 2011 「第 37 集」
55	2009.07.16	アラヤ遺跡 (第 4 地点)	既筆町 2953-1	個人住宅建設	米田暢敏	市教委 (試掘調査)	23	
56	2009.09.15 ～ 2009.11.17	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町 2771-13	個人住宅建設	米田暢敏	市教委 (本調査)	73	
57	2009.11.17 ～ 2009.11.18	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町字宿原敷 3001-3, 2998-4	個人住宅建設	星美賢吾 川口武彦	市教委 (試掘調査)	11.5	
58	2009.12.01 ～ 2009.12.24	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町 2771-14	個人住宅建設	米田暢敏	市教委 (本調査)	90	
59	2009.12.15 ～ 2010.01.13	アラヤ遺跡 (第 4 地点)	既筆町 2953-1	個人住宅建設	星美賢吾	市教委 (本調査)	119.5	
60	2010.04.06 ～ 2010.04.23	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町 2616-1 地先～ 2786-4 地先	市道常磐 123 号線道 路改良工事	高野浩之	地域文化財 (本調査)	88	市教委 2011 「第 40 集」
61	2010.01.25	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町字宿原 2844-2	集合住宅建設	星美賢吾	市教委 (試掘調査)	21.75	
62	2010.06.01	官街遺跡/ 長者山地区	既筆町字アラヤ 3057-2	個人住宅建設	川口武彦 金子千秋	市教委 (試掘調査)	19	
63	2010.08.09	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 2865	宅地造成	川口武彦	市教委 (試掘調査)	50.1	
64	2010.07.21 ～ 2010.07.23	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 2865	宅地造成	川口武彦	市教委 (本調査)	37.6	市教委 2011 「第 38 集」
65	2010.08.10	官街遺跡/ 南原原地区	既筆町 2835-2, -11, -12	駐車場造成	川口武彦	市教委 (試掘調査)	14	
66	2010.08.20	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 2865-6	個人住宅建設	川口武彦 色川順子	市教委 (試掘調査)	18	
67	2010.08.20	官街遺跡/ 宿屋敷地区	既筆町 2865	個人住宅建設	川口武彦 色川順子	市教委 (試掘調査)	13.6	

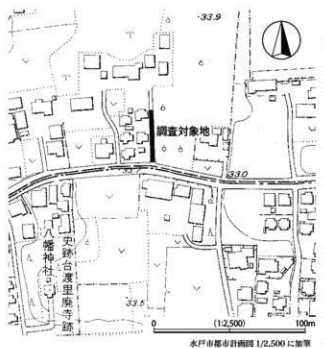
II 遺跡の周辺環境

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査(支援)機関	面積(m ²)	文献等
68	2010.09.01	アラヤ遺跡 (第3地点)	祝聖町字アラヤ3111、3090-3	個人住宅建設	米川穂歌 田中恵子	市教委 (試掘調査)	8	
69	2010.10.02 ～ 2010.10.07	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	祝聖町字前原 2865-6	個人住宅建設	川口武彦	市教委 (本調査)	67.26	
70	2010.10.02 ～ 2010.10.15	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	祝聖町字前原 2865	個人住宅建設	色川篤子	市教委 (本調査)	68	
71	2010.09.21	熊寺跡/ 南方地区	祝聖町字前原 2880-1、 2877-3、2879-2、2881-2 の一部	個人住宅内カーポート・物置建設	川口武彦	市教委 (試掘調査)	3.75	
72	2010.09.17	官衙遺跡/ 長者山地区	祝聖町字アラヤ 3057-2	個人住宅内浄化槽建設	川口武彦	市教委 (立会調査)	8	
73	2010.10.27 ～ 2010.11.19	アラヤ遺跡 (第3地点)	祝聖町字アラヤ3111、 3090-3	個人住宅建設	川口武彦 色川篤子	市教委 (本調査)	90.3	
74	2010.11.30	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	祝聖町字前原 2867	宅地造成	川口武彦	市教委 (試掘調査)	27	
75	2010.12.01	官衙遺跡/ 南原地区	祝聖町字前原 2894-8、-2、 -37	個人住宅建設	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	10.2	
76	2010.12.02	官衙遺跡/ 南原地区	祝聖町字前原 2832-0	個人住宅建設	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	15	
77	2010.12.02	官衙遺跡/ 南原地区	祝聖町字前原 2832-1	個人住宅建設	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	7.05	
78	2010.12.17	熊寺跡/ 南方地区	祝聖町 2898-1	賃貸住宅建替	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	45	
79	2011.01.20 ～ 2011.01.31	官衙遺跡/ 宿屋敷地区	祝聖町字前原 2867	宅地造成	新原 晃	東京軌業研究所 (本調査)	263.17	
80	2011.01.05 ～ 2011.01.06	官衙遺跡/ 長者山地区	祝聖町字長者山 3070 地先 ～ 3082 地先	常磐 223 号線道路改良工事	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	15.9	
81	2011.03.29 ～ 2011.04.14	官衙遺跡/ 長者山地区	祝聖町字アラヤ 3052-5 地先 ～ 3055-1 地先	法定外道路公共下水道建設工事	小川長博	シン技術コンサル (本調査)	34.1	本報告

III 台渡里廃寺跡 (台渡里第81次)

1 調査の方法と経過

公共下水道工事に伴う掘削部分の南北37m×幅1mを対象として調査区を設定した(第3図)。調査面積は34.1㎡を測る。調査区は台渡里廃寺跡の北東部、長者山地区の南東部に位置する。平成18年から21年にかけて国の史跡追加指定に向けた範囲確認調査が実施され、那賀郡銜の正倉院を区画する二重の区画施設が確認されている。今回の調査区では、外側の区画施設が検出されることが想定された。3月29日からアスファルトの除去を開始し、重機を用いて調査区北側から表土掘削を開始した。地表下65cm前後でローム層を確認し、これを遺構確認面として南側に範囲を広げた。遺構調査はすべて人力で行った。調査の結果、調査区中央付近で想定された区画施設が検出され、調査区南端では礎石建物跡と推定される掘込地業が検出された。調査終了後に路面の仮復旧を行い、4月13日にすべての作業を終了した。掘込地業は現状保存のため下水道管の埋設位置を変更する処置がとられた。遺構図の作成は、トータルステーションによる機器測量と写真測量を併用した。遺構内出土遺物は、原則としてトータルステーションを用いて3次元データを取得した。写真記録は、35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ(1000万画素)を使用した。4月25日から出土遺物・図面・写真の整理作業を開始し、その後掲載遺物の選別・実測を行った。6月13日からDTPソフトウェアによる報告書版組作業を行い、印刷業者に入稿した。



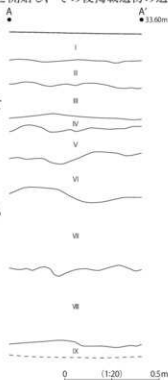
第3図 調査対象地の位置

2 基本土層

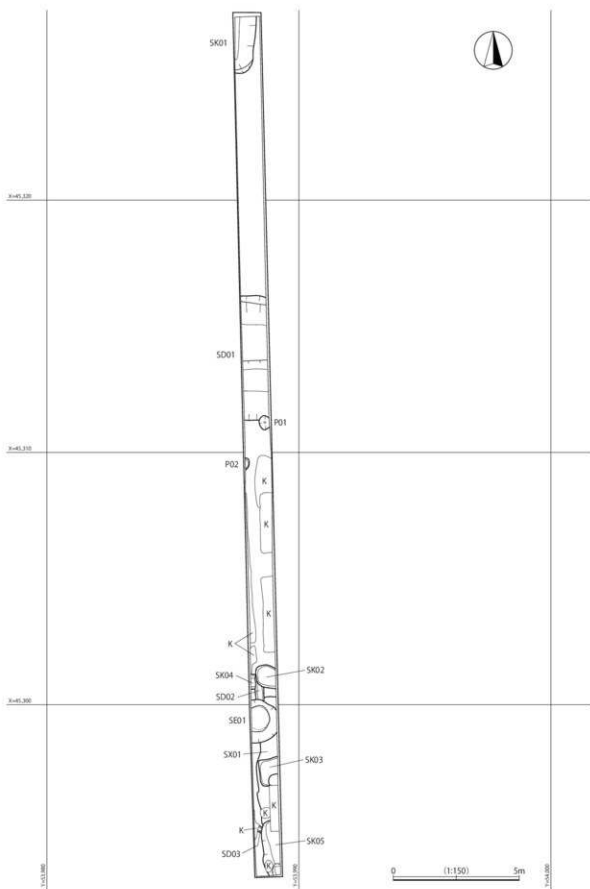
調査区北側に基本土層確認のためのテストピットを設け、西側壁面を利用して土層観察を行った。基本土層の概要は以下の通りである(第4図)。

I : 路面及び碎石

- II : 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 締まり強 ローム粒30%, 炭化物1%
 III : 10YR3/3 暗褐色土 粘性中 締まり強 ローム粒10%, ロームブロック1%
 IV : 10YR2/3 黒褐色土 粘性中 締まり中 ローム粒5%
 V : 10YR4/6 褐色土 粘性中 締まり中 暗褐色土40%
 VI : 10YR4/6 褐色土 粘性中 締まり中 ソフトローム層
 VII : 10YR5/8 黄褐色土 粘性中 締まり非常に強い ハードローム層
 VIII : 10YR4/6 褐色土 粘性中 締まり非常に強い ハードローム層
 IX : 鹿沼軽石層



第4図 基本土層



第 5 圖 遺構配置圖

3 検出された遺構と遺物

遺構は調査区のはほぼ全域で検出され、南側にやや集中している。検出された遺構は掘込地業1基、溝跡3条、井戸跡1基、土坑5基、ピット2基である。以下、主な遺構について報告を行う。その他の遺構については、遺構観察表を参照されたい。

掘込地業 (SX01) (第6図)

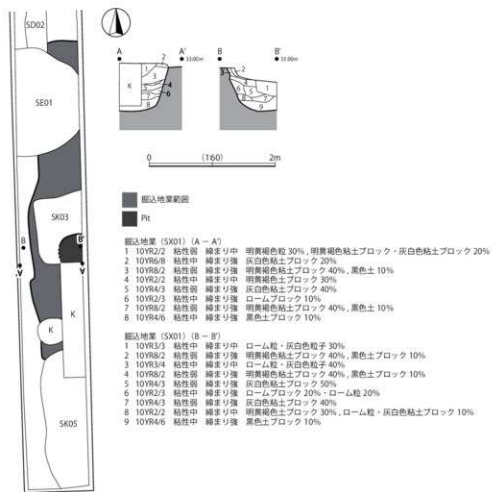
検出位置 調査区南端に位置する。大半が調査区外に延びており、一部攪乱により壊されている。官衙に関連する遺構と考えられ、保存を前提としたサブトレンチでの確認調査を行った。SD02・SE01・SK03・SK05より古い。

規模 確認長は南北5.1m以上、東西0.85m以上で、深さ76cmである。

構造 掘り方底面付近はローム主体の褐色版築土で、その上に灰白色粘土主体の版築土と黒褐色土主体の版築土を積み上げて基礎を構築している。また、中央付近で径45cm以上、確認面からの深さ45cmのピット1基が検出された。聞き取り調査で、昭和30年代の掘削時に大型の礫が出土していることを確認した。このことから布地業あるいは総地業による礎石建物跡であると推定される。

遺物 遺物は出土していない。

時期 遺構の形状や軸方向から、官衙または廃寺跡に関連する遺構と考えられ、奈良・平安時代のものとみられる。



第6図 掘込地業

第 1 号溝跡 (SD01) (第 7～9 図)

検出位置 調査区中央付近に位置する。P01 より古い。

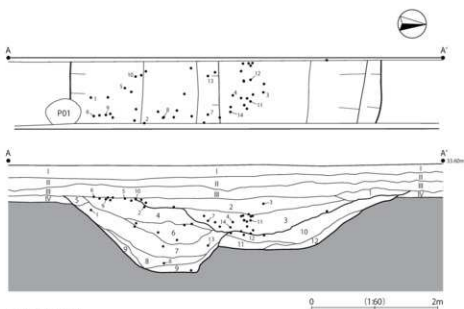
規 模 東方から西方向に向かって走っており、主軸は N-89°-W である。

構 造 第 38 次のトレンチ 3 で確認された SD01, 第 48 次のトレンチ 3～5 で確認された SD03, 第 54 次のトレンチ 1 で確認された SD02 と連結し、正倉院を二重に区画する外側の溝と考えられる。

埋没過程 自然堆積により埋没した後、再掘削されている。改修前の溝は、断面が逆台形状を呈し、上面幅 2.64m 以上、底面幅 1.24m、深さ 82cm である。改修後の溝も断面が逆台形状を呈し、上面幅 2.65m 以上、底面幅 0.87m、深さ 119cm である。また、土層観察で確認した 1～3 層は、堆積状況から中世の道路跡の可能性が考えられる。

遺 物 瓦・須恵器が出土している。1 は、曲線頸の軒平瓦で、頸面は素文である。凹面の頸面側には指頭圧痕がみられる。2～4 は、丸瓦で、凸面がヘラナデ・ヘラケズリ調整される。2 の凹面には、布目の上から、広端部に並行して、ナデによる線が引かれている。5～12 は平瓦である。5・6 は、凸面にヘラケズリ調整が施される。7～9 は、凸面が格子叩き成形で、7 はヘラケズリ調整、8・9 はナデ調整が施される。10～12 は凸面が縄叩き成形で、11 はヘラナデ調整が施される。10 の内面には被熱痕跡がみられる。13 は、須恵器長頸壺の頸部である。14 は灰軸陶器瓶類で、内面に段差を持ち、自然釉がみられる。

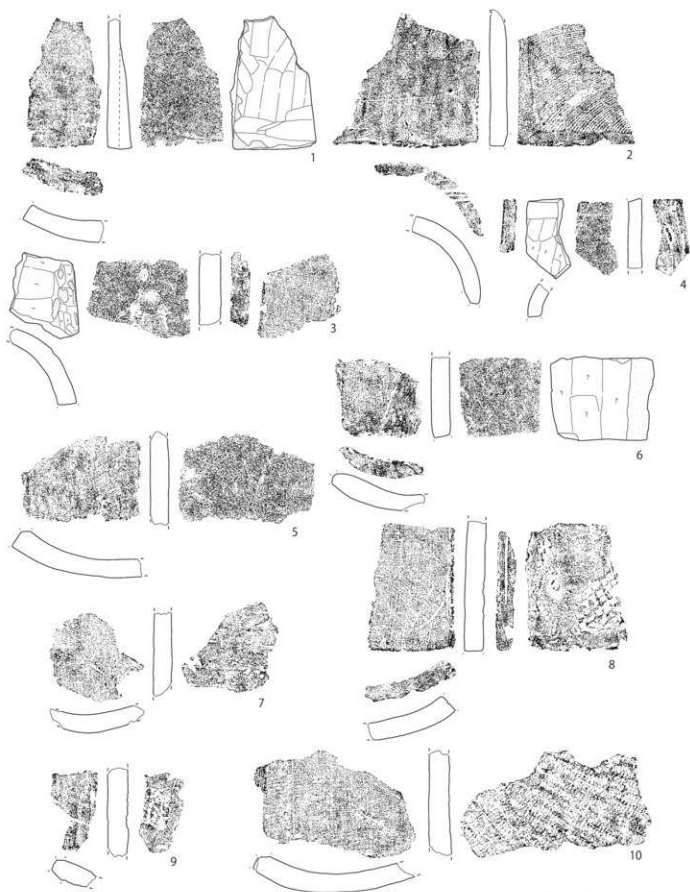
時 期 覆土中から灰軸陶器瓶類の破片が出土していることから、9 世紀中頃～後半には埋没していたものとみられる。



第 1 号溝跡 (SD01)

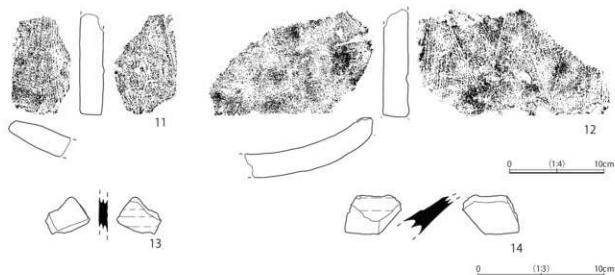
- | | | | | |
|----|---------|-----|----------|-------------------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 5%, 炭化物粒 1% |
| 2 | 10YR2/2 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒・赤色粒子粒 1% |
| 3 | 10YR3/3 | 粘性中 | 締まり非常に強い | マンガン粒 5%, ローム粒 1% |
| 4 | 10YR2/2 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 10%, 赤色粒子 1% |
| 5 | 10YR3/2 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 30% |
| 6 | 10YR2/2 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 30% |
| 7 | 10YR3/2 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 40%, 赤色粒子・炭化物 1% |
| 8 | 10YR2/1 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 40%, ロームブロック 1% |
| 9 | 10YR4/4 | 粘性中 | 締まり弱 | ローム粒 30%, ロームブロック 5%, 磨道礫石 5% |
| 10 | 10YR2/1 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 5% |
| 11 | 10YR3/2 | 粘性中 | 締まり弱 | ローム粒 20% |
| 12 | 10YR2/3 | 粘性中 | 締まり中 | ローム粒 40%, ロームブロック 1% |

第 7 図 第 1 号溝跡



第8圖 第1号溝跡出土遺物(1)

III 台渡里廃寺跡 (台渡里第 81 次)



第9図 第1号溝跡出土遺物(2)

第3表 第1号溝跡出土軒平瓦観察表

図版番	通番	出土地点・遺構	形式	瓦当部長 (cm)	瓦当部厚 (cm)	平瓦部厚 (cm)	裏面段差 (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
	8 1	SD01	—	18.8	2.4	1.4	—	布目	ナデ	—	ナデ	長石・石英・黒色粒子	○	10YR7/1 灰白色	瓦外面素文

第4表 第1号溝跡出土丸瓦観察表

図版番	通番	出土地点・遺構	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
	8 2	SD01	114.5	1.8	糸切り・布目	—	—	ヘラナデ	長石	○	外面：10YR5/3 にぶい黄褐色 内面：10YR6/3 にぶい黄褐色	
	8 3	SD01	19.0	2.8	布目	—	—	ナデ	長石・石英		外面：10YR7/1 灰白色 内面：10YR7/2 にぶい黄褐色	
	8 4	SD01	18.4	2.0	布目	ナデ	—	ヘラケズリ	長石・石英		10YR8/1 灰白色	

第5表 第1号溝跡出土平瓦観察表

図版番	通番	出土地点・遺構	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
	8 5	SD01	19.8	2.8	糸切り・布目	ナデ	—	ヘラナデ・ナデ	長石・石英 (+++)		外面：10YR6/2 灰黄褐色 内面：10YR4/1 薄灰色	
	8 6	SD01	18.4	2.0	布目	ヘラナデ	—	ヘラナデ	長石・石英 (+++)		10YR7/3 にぶい黄褐色	
	8 7	SD01	18.7	2.0	布目	ヘラナデ	格子叩き	ナデ	長石・石英 (+++)	○	10YR4/1 薄灰色	
	8 8	SD01	113.7	2.3	糸切り・布目	ナデ	格子叩き	ナデ	長石・石英 (+++)		10 Y R 6/1 薄灰色	
	8 9	SD01	19.3	2.1	布目	ナデ	格子叩き	ナデ	長石 (+++)		外面：2.5YR5/8 明赤褐色 内面：5YR6/8 褐色	
	8 10	SD01	111.8	2.3	布目	—	網叩き	—	長石・石英 (+++)	○	外面：10YR5/3 にぶい黄褐色 内面：10YR5/4 にぶい黄褐色	凹面に被熱痕跡
	9 11	SD01	110.5	2.5	糸切り・布目	—	網叩き	ヘラナデ	長石・石英 (+++)		7.5YR7/8 黄褐色	
	9 12	SD01	111.4	2.8	糸切り・布目	ナデ	網叩き	—	長石・石英 (+++)		7.5YR7/6 褐色	

第6表 第1号溝跡出土土器観察表

図版番	通番	出土地点・遺構	器種	法量 (cm)			焼成	胎土鉱物	海綿骨針	色調	調整
				口径	底径	器高					
	9 13	SD01	須恵系長頸甕	—	—	12.7	良好	長石・石英		5Y6/1 灰	外面：9YR7/7 内面：9YR7/7
	9 14	SD01	灰胎陶器 甕	—	—	12.9	良好	長石・石英	○	5Y7/1 灰白色	外面：9YR7/7 内面：9YR7/7・自然釉

第1号井戸跡 (SE01) (第10～15図)

検出位置 調査区南側に位置し、一部調査区外に延びている。SX01・SD02より新しい。

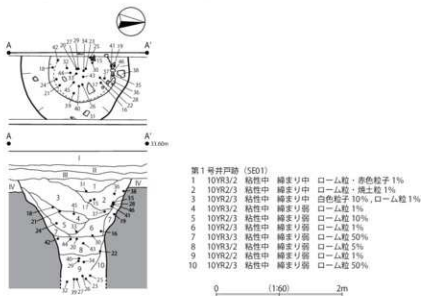
規模 平面形は円形で、上面径1.68mである。安全確保のため、地表面から約220cmで掘削を終了した。このため、底面は確認できていない。

構造 断面は上半部が広がる漏斗状を呈する。

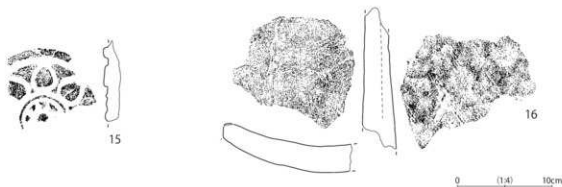
埋没過程 覆土中から多量の瓦が出土しており、ごみ穴として再利用されたものと考えられる。

遺物 瓦・土師器・石製品が出土している。15は、単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。外区及び瓦裏面は欠損している。中房が一重の圏線で囲まれた中に、扇状の周縁連子が8つ配され、蓮弁、弁間の頂部が平坦である。3107形式(川口・瀧美ほか2009)に該当するが、標式資料より蓮弁が広く、よりハート型に近い。16は、粘土板の合せ目があり、広端部に向かって厚みを増すことから、軒平瓦とみられる。凹面には分割線と考えられる紐痕跡がみられる。17～24は丸瓦で、凸面はヘラケズリ、ヘラナデ調整が施される。23は、須恵質の緻密な焼成で、自然釉がみられる。25～43は平瓦である。25・26は凸面にヘラケズリ・ヘラナデ調整が施され、27・29～33は格子叩き成形、34～43は細叩き成形である。28は桶巻作りで、凹面に幅2.5cmの枠板瓦痕がみられる。34・39・43は一枚作りで、凹面側縁に布の末端痕がみられる。35は、粘土板の合せ目にハケメが施されている。44・45はかわらけで、底部は回転系切り未調整である。44は大皿とみられる。46は、研磨面が認められ砥石とみられる。

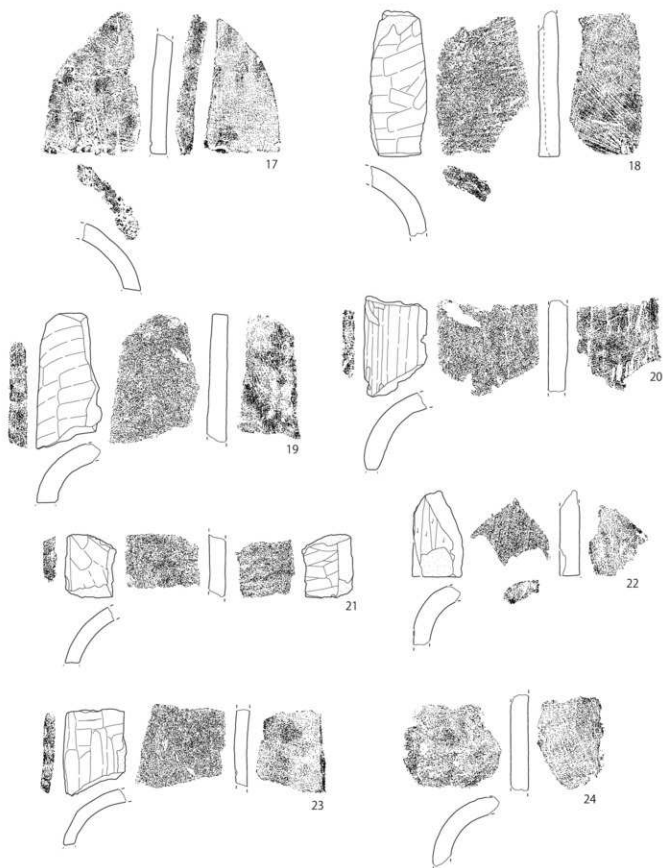
時期 出土遺物から、16世紀頃の廃絶とみられる。



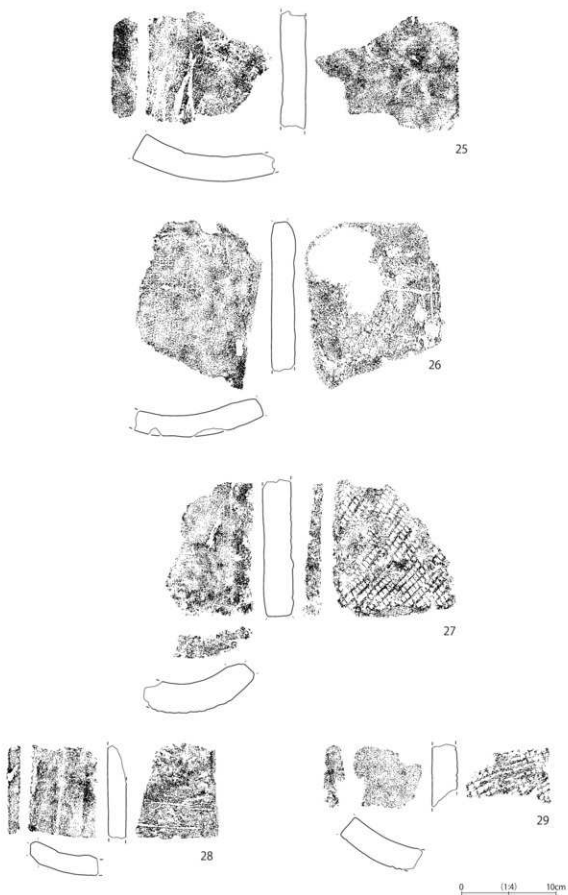
第10図 第1号井戸跡



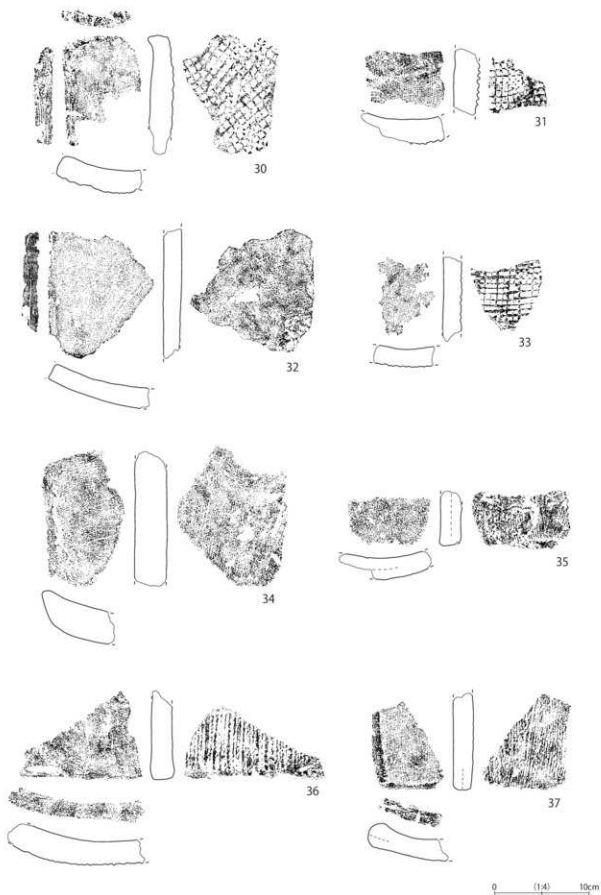
第11図 第1号井戸跡出土遺物(1)



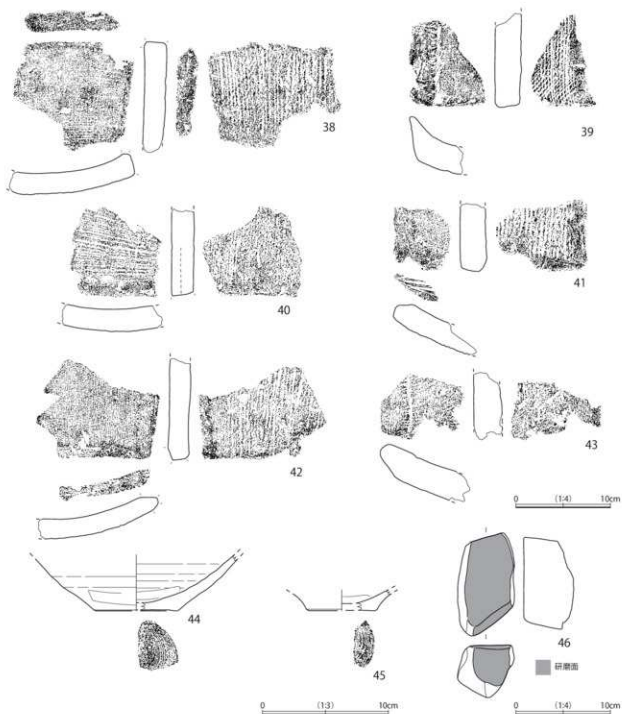
第 12 図 第 1 号井戸跡出土遺物 (2)



第13圖 第1号井戸跡出土遺物(3)



第 14 圖 第 1 号井戸跡出土遺物 (4)



第15図 第1号井戸跡出土遺物(5)

第7表 第1号井戸跡出土軒丸瓦観察表

図番	通番	出土地点・遺構	形式	瓦当面径 (cm)	瓦当部厚 (cm)	全長 (cm)	内区			胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
							花卉長 (cm)	花卉幅 (cm)	外縁高 (cm)				
11	15	SE01	3107	—	—	8.6	2.5	2.1	—	—	—	10YR8/1 灰白色	単弁八弁蓮華文

第8表 第1号井戸跡出土軒平瓦観察表

図番	通番	出土地点・遺構	形式	瓦当部長 (cm)	瓦当部厚 (cm)	平瓦部厚 (cm)	裏面段差 (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考

III 台渡里廃寺跡(台渡里第81次)

第9表 第1号井戸跡出土丸瓦観察表

図版番号	出土地点・遺構	全長(cm)	厚さ(cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
12-17	SE01	12.0	1.8	布目	ナデ	—	ヘラナデ	長石	○	10YR5/1 褐色	
12-18	SE01	15.4	2.1	糸切り・布目	—	—	ヘラナデ	長石・石英		10YR5/4 にぶい黄褐色	
12-19	SE01	16.4	2.0	糸切り・布目	—	—	ヘラナデ	長石・石英		外面：10YR5/1 褐色 内面：10YR8/1 褐色	
12-20	SE01	10.5	2.0	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	長石・石英		10YR6/1 褐色	
12-21	SE01	16.7	1.8	—	ナデ	—	ヘラナデ	長石・石英	○	5Y5/1 灰色	
12-22	SE01	9.1	2.1	布目	—	—	ヘラケズリ	長石・石英		5YR7/8 褐色	
12-23	SE01	8.9	1.3	布目	—	—	ヘラナデ	長石・石英		10YR6/1 褐色	須磨瓦
12-24	SE01	10.1	2.1	糸切り・布目	—	—	ヘラケズリ	長石・石英		外面：2.5Y6/1 黄灰色 内面：2.5Y6/2 灰黄色	粘土板の合せ目あり

第10表 第1号井戸跡出土平瓦観察表

図版番号	出土地点・遺構	全長(cm)	厚さ(cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
13-25	SE01	12.2	2.7	布目	—	—	ヘラナデ	長石・石英		10YR8/3 浅黄褐色	
13-26	SE01	15.8	2.5	布目	—	—	ヘラケズリ	長石・石英		10YR8/3 浅黄褐色	
13-27	SE01	14.4	3.1	布目	—	格子叩き	—	長石・石英		10YR5/1 褐色	
13-28	SE01	19.6	2.0	布目	—	—	ヘラケズリ	長石・石英		10YR8/4 浅黄褐色	特製瓦頭、箱巻作り
13-29	SE01	16.4	2.6	布目	—	格子叩き	—	長石・石英	○	10YR6/4 にぶい黄褐色	
14-30	SE01	12.0	2.4	布目	—	格子叩き	—	長石・石英	○	10YR8/2 灰白色	一枚作り
14-31	SE01	15.9	2.8	布目	—	格子叩き	—	長石		外面：10YR3/1 黒褐色 内面：10YR2/1 黒色	
14-32	SE01	13.4	1.9	布目	—	格子叩き	ヘラナデ	長石・石英	○	10YR6/1 褐色	粘土板の合せ目あり
14-33	SE01	8.9	2.0	布目	—	格子叩き	—	長石・石英		外面：N20 黒色 内面：10YR6/2 灰黄褐色	凸面に自然軸
14-34	SE01	14.0	3.4	糸切り・布目	—	網叩き	—	長石・石英	○	10YR7/4 にぶい黄褐色	一枚作り
14-35	SE01	14.8	2.4	布目	—	網叩き	—	長石・石英	○	2.5Y6/3 にぶい黄褐色	粘土板の合せ目にハケメ
14-36	SE01	8.2	3.0	布目	—	網叩き	—	長石・石英	○	10YR5/1 灰黄褐色	
14-37	SE01	10.2	2.7	布目	—	網叩き	—	長石	○	10YR7/4 にぶい黄褐色	粘土板の合せ目あり
15-38	SE01	11.7	2.2	糸切り・布目	ナデ	網叩き	—	長石・石英	○	10YR5/1 灰黄褐色	
15-39	SE01	9.8	2.8	布目	—	網叩き	—	長石・雲母		10YR8/3 浅黄褐色	一枚作り
15-40	SE01	19.1	2.4	糸切り・布目	—	網叩き	ヘラナデ	長石・石英		10YR7/2 にぶい黄褐色	粘土板の合せ目あり
15-41	SE01	16.9	2.8	布目	ヘラケズリ	網叩き	—	長石・石英	○	7.5YR7/4 にぶい褐色	凸面に指紋
15-42	SE01	10.0	2.0	布目	—	網叩き	—	長石・石英	○	10YR8/3 浅黄褐色	
15-43	SE01	17.1	3.0	糸切り・布目	—	網叩き	ヘラナデ	長石・石英	○	10YR8/3 浅黄褐色	一枚作り

第11表 第1号井戸跡出土土器観察表

図版番号	出土地点・遺構	器種	法量 (cm)		焼成	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考	
			口径	底径						
15-44	SE01	かわらけ大皿Ⅱ	—	(6.5)	14.0	良好	長石・石英	○	10YR6/8 黄褐色 外面：体部2777、底面同軸糸切り 内面：2777	16世紀
15-45	SE01	かわらけ	—	(5.4)	11.7	良好	長石・石英		10YR5/4 にぶい黄褐色 外面：体部2777、底面同軸糸切り 内面：2777	16世紀

第12表 第1号井戸跡出土土製品観察表

図版番号	出土地点・遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
15-46	SE01	碓石	11.0	5.9	5.3	460.3	砂岩製

第1号土坑（SK01）（第16・17図）

検出位置 調査区北端に位置する。大半が調査区外へ延びており、全容は不明である。

規模 平面形は隅丸方形で、南北2.21m以上、東西0.85m以上、深さ80cmである。

構造 壁の立ち上がりはやや急で、底面はほぼ平坦である。

埋没過程 自然堆積の様相を示している。

遺物 縄文土器・土師器・瓦が出土している。47は、凹面側縁に布の末端痕がみられ、布目の上から側縁に並行して、ナデによる線引きがみられる。48は丸瓦で、須恵質の緻密な焼成である。

時期 III層上面から掘り込まれていることから、中世以降のものとみられる。

第2号土坑（SK02）（第16・17図）

検出位置 調査区南側に位置し、一部が調査区外へ延びている。SD02より新しい。

規模 平面形は円形で、上面径0.87m、深さ9cmである。

構造 壁の立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦である。人骨の出土状況から墓坑と考えられる。

埋没過程 人為的に埋め戻されている。

遺物 人骨が出土しているが、遺存状況が非常に悪い。49は凸面が格子叩き成形の丸瓦で、釘穴がある。

時期 覆土の状況から古代以降のものとみられる。

第3号土坑（SK03）（第16・17図）

検出位置 調査区南端に位置し、一部が調査区外へ延びている。SX01より新しい。

規模 平面形は方形で、南北1.06m、東西0.81m以上、深さ16cmである。

構造 壁の立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦である。掘込地業（SX01）を掘り込んでおり、礎石の抜き取り穴の可能性も考えられる。

埋没過程 自然堆積の様相を示している。

遺物 瓦が出土している。50は、凹面がヘラケズリ調整される丸瓦である。

時期 出土遺物と覆土の状況から古代のものとみられる。

第4号土坑（SK04）（第16・17図）

検出位置 調査区南側に位置し、大半が調査区外へ延びている。SD02より古い。

規模 南北0.58m、東西0.20m以上で、深さ14cmである。

構造 壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埋没過程 自然堆積の様相を示している。

時期 遺物が出土していないため不明である。

第5号土坑（SK05）（第16・17図）

検出位置 調査区南端に位置する。大半が調査区外へ延びており、SX01・SD03より新しい。

規模 南北2.17m、東西0.75m以上、深さ43cmである。

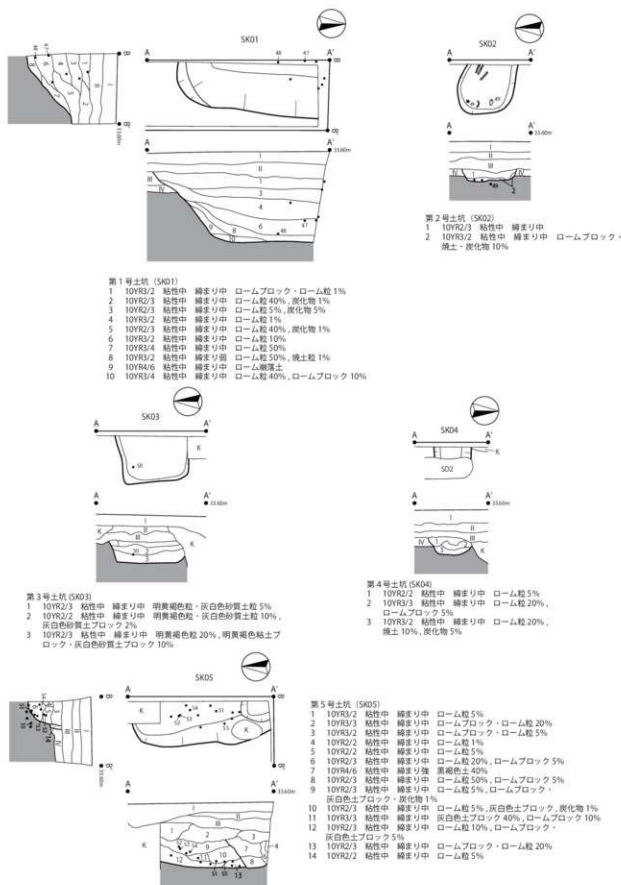
構造 壁の立ち上がりは急である。底面はほぼ平坦で、南端部がわずかに落ち込む。断面の観察から柱穴状の掘り込みを確認した。

埋没過程 人為的に埋め戻されている。

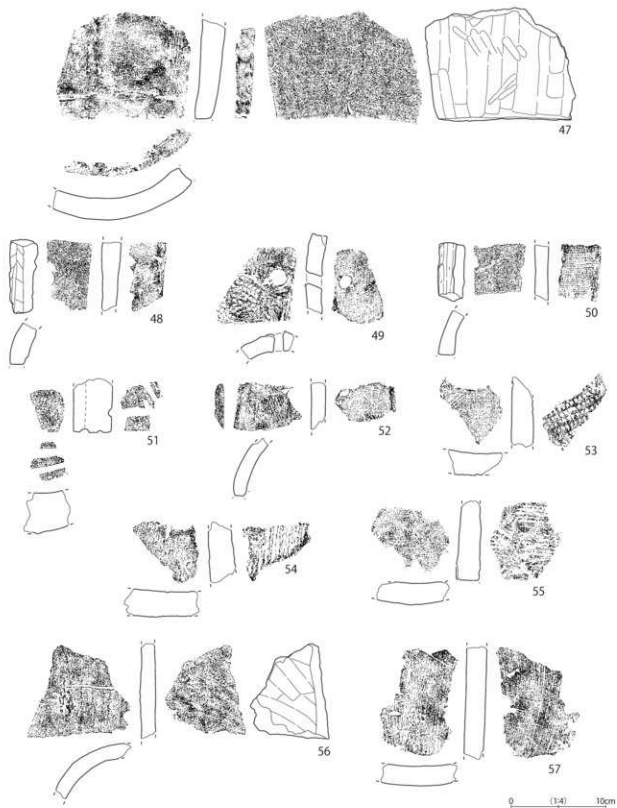
遺物 瓦が出土している。51は、軒平瓦である。瓦当は三重の弧線文で、頸面は瓦当面に並行する沈線と鋸歯文がみられる。3201形式（川口・瀬美ほか2009）に該当するものである。52は、凸面が縄叩き成形の丸瓦である。53～55は、平瓦である。53は、凸面が格子叩き成形で、54と55は、縄叩き成形である。

時期 出土遺物と覆土の状況から古代のものとみられる。

III 台渡里廢寺跡 (台渡里第 81 次)



第 16 図 第 1～5 号土坑



第 17 圖 土坑・遺構外出土遺物

第 13 表 土坑出土軒平瓦觀察表

図版 通番	出土地点 ・遺構	形式	瓦当 部長 (cm)	瓦当 部厚 (cm)	平瓦 部厚 (cm)	裏面 段差 (cm)	凹面 痕跡	凹面 調整	凸面 痕跡	凸面 調整	胎土鉱物	海綿 骨針	色調	備考
17 51	SK05	3201	3.6	3.7	1.2	—	—	ナデ	—	ナデ	長石・石英 ・珩		10YR5/ 灰黄褐色	瓦当面・重低線文 割面割面文

第 14 表 土坑・遺構外出土瓦観察表

図版番	出土地点・遺構	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	色調	備考
17-48	SK01	17.81	2.0	布目	—	—	ヘラナデ	長石・石英 + + +	○	10YR4/1 褐色色	
17-49	SK02	19.51	1.7	布目	—	格子叩き	ナデ	長石・石英 + + +	○	5Y5/1 灰色	釘穴あり
17-50	SK03	16.11	1.4	布目	—	—	ヘラケズリ	長石・石英 + + +		10YR8/1 灰白色	
17-52	SK05	14.81	1.5	布目	—	—	ヘラケズリ	長石・石英 + + +		5Y6/8 褐色色	
17-47	SK01	11.71	2.4	赤切り・布目	△△△・△△	—	△△△・△△	長石・石英		10YR7/1 灰白色	
17-53	SK05	17.11	2.5	布目	—	格子叩き	—	長石・石英		10YR7/1 灰白色	
17-54	SK05	17.41	2.8	布目	—	網叩き	—	長石・石英 + + +	○	10YR6/2 灰黄褐色	
17-55	SK05	18.41	2.4	布目	—	網叩き	—	長石・石英 + + +	○	5Y5/1 褐色色	
17-56	表土	19.91	1.7	—	—	ナデ	—	ヘラナデ		5Y6/1 灰色	ヘラ書き
17-57	表土	11.81	2.1	赤切り・布目	—	赤切り	—	長石・石英		5Y5/1 灰色	

第 15 表 第 81 次調査出土遺物総量

出土地点	SK01	SD01	SE01	SK01	SK02	SK03	SK04	SK05	表土	総点数	総重量 (g)						
出土遺物	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	総重量 (g)						
縄文 深鉢				1	8.0						1	8.0					
杯			1	6.0							1	6.0					
土師器 椀			1	8.8							1	8.8					
甕			1	25.2	2	8.9		1	11.9		4	45.9					
甕			2	109.6							2	109.6					
須恵器 長頸甕		1	6.6								1	6.6					
不明		1	29.2								1	29.2					
瓦	29	6065.6	56	13886.4	7	1359.1	1	160.5	1	67.3	9	901.0	21	1343.2	124	23783.1	
かわらけ			2	72.8							2	72.8					
磚		15	12807.8	14	8394.3	2	579.0				1	149.4			30	21800.4	
総計	44	18960.2	77	22373.0	12	1955.0	1	160.5	1	67.3	11	1062.3	21	1343.2	167	45861.4	

第 16 表 第 81 次調査出土瓦計量表

出土地点		SD01			SE01			SK01			総点数	総重量 (g)
遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)		
平瓦	格子目叩き				5	5	911.2				5	911.2
	格子目叩き + ヘラ割り・ナデ	3	3	769.9	4	4	1,335.2				7	2,105.1
	網叩き	5	5	1,601.2	9	9	2,383.8	1	1	229.1	15	4,214.1
	網叩き + ヘラ割り・ナデ	1	1	220.5	4	4	1,785.1				5	2,005.6
	ヘラ割り・ナデ	11	11	2,046.6	16	16	3,701.1	5	5	1,039.9	32	6,787.6
	分類不能なもの				1	1	204.6				1	204.6
平瓦小計	20	20	4,638.2	39	39	10,321.0	6	6	1,269.0	65	16,228.2	
丸瓦	ヘラ割り・ナデ	8	8	1,283.2	15	15	3,100.7	1	1	90.1	24	4,474.0
	格子目叩き	1	1	144.2							1	144.2
	格子目叩き + ヘラ割り・ナデ				2	2	464.7				2	464.7
	丸瓦小計	9	9	1,427.4	17	17	3,565.4	1	1	90.1	27	5,082.9
総計	29	29	6,065.6	56	56	13,886.4	7	7	1,359.1	92	21,311.1	

出土地点		SK02			SK03			SK05			総点数	総重量 (g)
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)		
平瓦	格子目叩き							1	1	104.1	1	104.1
	格子目叩き + ヘラ割り・ナデ											
	網叩き							2	2	329.9	2	329.9
	網叩き + ヘラ割り・ナデ											
	ヘラ割り・ナデ							5	5	411.9	5	411.9
	分類不能なもの											
平瓦小計	0	0	0.0	0	0	0.0	8	8	845.9	8	845.9	
丸瓦	ヘラ割り・ナデ				1	1	67.3	1	1	55.1	2	122.4
	格子目叩き	1	1	160.5							1	160.5
	格子目叩き + ヘラ割り・ナデ											
	丸瓦小計	1	1	160.5	1	1	67.3	1	1	55.1	3	282.9
総計	1	1	160.5	1	1	67.3	9	9	901.0	11	1,128.8	

第17表 溝跡・ピット観察表

遺構番号	調査区	掘り込み面	平面形態	断面形態	確認長 (cm)	幅 (cm)	確認面からの深さ (cm)	底面標高	出土遺物	備考
SD02		IV層上面	—	弧状	(104)	35	11	32.76	—	SD01-SK02より古い SX01-SK04より新しい
SD03		IV層上面	—	U字状	(16)	22	17	32.72	—	SK05より古い
遺構番号	調査区	掘り込み面	平面形態	断面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	確認面からの深さ (cm)	底面標高	出土遺物	備考
P01		—	(円形)	U字状	56	(41)	47	32.32	—	SD01より新しい
P02		IV層上面	(円形)	U字状	48	(17)	13	32.84	—	

遺構外出土遺物（第17図）

56は、凹面がナデ調整される丸瓦である。凸面にヘラ書きが認められる。57は、両面に糸切り痕跡が認められる平瓦で、原の寺瓦窯跡産のものと考えられる。

4 総括

今回の調査では、那賀郡御正倉院を区画する区画施設の外溝南辺が検出され、東辺と同様に、再掘削されていることを確認した。また、正倉院の区画外に掘込地業（SX01）が検出され、台渡里廃寺跡との関連が想定される。ここでは、掘込地業（SX01）と第1号溝跡（SD01）について検討する。

掘込地業（SX01） 西辺が、概ねN-1°-Wを示し、過去の掘削時に大型の礫が出土しており、布地業あるいは総地業による礎石建物跡と推定されるものである。遺物が出土していないため詳細な時期決定はできないが、これまでの調査成果を概観すると、調査区の南側に隣接する観音堂山地区では、7世紀第4四半期頃に初期寺院が創建され、8世紀第4四半期まで継続して造営されていたことが確認されている。その後、観音堂山地区の寺院・礎石建物跡は火災により消失し、9世紀第3四半期頃に南方地区に移動して再建されている（川口・小松崎ほか2005）。また、那賀郡御正倉院では、8世紀前葉になると主軸方向が真北の瓦葺正倉（瓦倉）が造営されるようになることとされている（源美・川口2011）ことから、時期は8世紀前葉から9世紀中頃の範囲に収まるものと考えられる。また、掘込地業（SX01）と重複する井戸跡（SE01）から、単弁蓮華文軒丸瓦や多量の丸瓦、平瓦が出土している。井戸跡（SE01）は、ごみ穴として再利用されており、周辺に存在した瓦を掃除するために投げ込んだものと考えられる。礎石建物跡は瓦葺であった可能性が高く、寺院関連の建物跡と考えられる。観音堂山地区では、これまでの調査で初期寺院の伽藍と寺院を区画する溝が検出され、25次調査では初期寺院の東限を再考させる溝が検出されている（大橋・佐々木2006）。今回確認された礎石建物跡は、東側だけではなく北側にも寺院城がひろがっていた可能性を指摘できるものであり、今後の調査成果に期待したい。

第1号溝跡（SD01） 調査区中央付近で、正倉院の外溝南辺を確認した。これまでの調査で、灰陶器瓶類の破片が出土しており、9世紀中頃から後半にある程度埋没していたものとみられている。今回の調査では、時期決定できる遺物は出土していないが、再掘削後の区画溝から凹面に被熱の痕跡が認められる瓦(10)が出土している。正倉院は、瓦倉SB002の周辺から炭化米が出土したこと、瓦倉SB002、SB003、SB004、SB005の礎石に被熱痕跡が確認されたこと、瓦倉SB001出土瓦に被熱痕跡や葺き土が二次焼成により固着したものが確認されたことなどから、火災により消失した可能性が高いとされている（源美・川口2011）。このことから、外溝は正倉院が火災により消失した後に、埋没したものと考えられる。第1号溝跡は、これまでの調査で想定されていた位置に検出され、正倉院を区画することを裏付けるものである。今後は、この区画溝出入口の確認や初期寺院との関係について検証が必要であろう。（小川）

IV 堀遺跡 (第29地点)

1 調査の方法と経過

公共下水道工事に伴う掘削部分の南北28m×幅1mを対象とした。調査対象地は駐車場の出入口があり、周辺住民の通行を確保するために3ヶ所にわたって調査区を設定した。便宜的に南から北に向かって1～3区と呼称した(第20図)。調査面積は20.7㎡を測る。調査区は、平成6年度調査の第4地点の東側に位置し、平成19年度調査の第9地点の南西側に隣接する(第18図)。これまでの調査成果から、古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出されることが想定された。4月14日から重機を用いて1・2区の表土掘削を行い、先行して調査を開始した。1区中央付近の表土からは、遺物がややまとまって出土したため、一部人力による掘り下げを行った。調査の結果、1区南端から掘立柱建物跡の柱穴などが検出され、2区北端の調査区壁際からは、土坑状の遺構が検出された。1・2区の埋め戻し及び路面の仮復旧後に、3区の調査を開始した。3区では竪穴建物跡が検出され、覆土の状況などから、2区北端の土坑状の遺構が、竪穴建物跡の一部であることを確認した。調査終了後に路面の仮復旧を行い、23日にすべての作業を終了した。遺構図の作成は、トータルステーションによる器械測量と写真測量を併用した。遺構内出土遺物は、原則としてトータルステーションを用いて3次元データを取得した。写真記録は、35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ(1000万画素)を使用した。4月25日から出土遺物・図面・写真の整理作業を開始し、その後掲載遺物の選別・実測を行った。6月13日からDTPソフトウェアによる報告書版組作業を行い、印刷業者に入稿した。

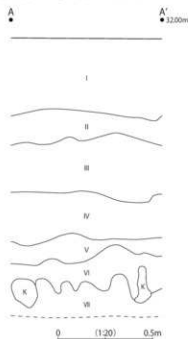


第18図 調査対象地の位置

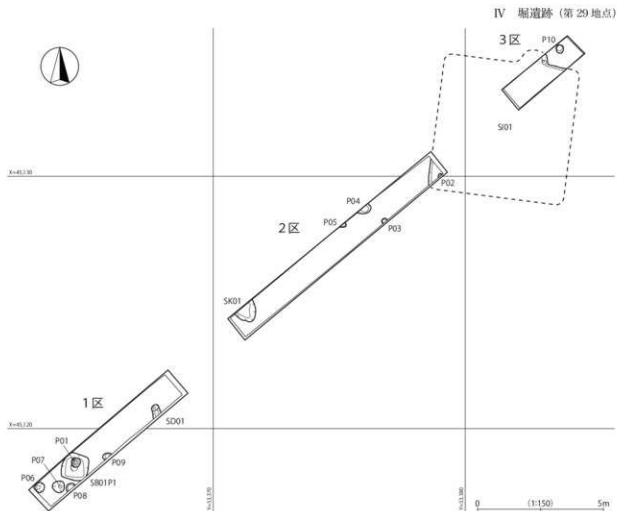
2 基本土層

I区北側の南側壁面で土層観察を行った。基本土層の概要は以下の通りである(第19図)。

- I：砕石・盛土
 II：10YR2/2 黒褐色土 粘性中 締まり中 白色粒子5%
 III：10YR4/2 灰黄褐色土 粘性中 締まり中
 黒褐色土ブロック10% (旧耕作土)
 IV：10YR2/2 黒褐色土 粘性中 締まり中
 ローム粒1% 白色粒子5% (古代の包含層)
 V：10YR2/3 黒褐色土 粘性弱 締まり弱
 ローム粒5% 白色粒子1%
 VI：10YR3/4 暗褐色土 粘性中 締まり中
 ローム粒20%, 黒色土ブロック10%
 VII：10YR4/6 褐色土 粘性中 締まり中 ソフトローム層



第19図 基本土層



第20図 遺構配置図

3 検出された遺構と遺物

検出された遺構は竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑1基、ピット10基である。以下、竪穴建物跡と掘立柱建物跡について報告を行う。その他の遺構については、遺構観察表を参照されたい。

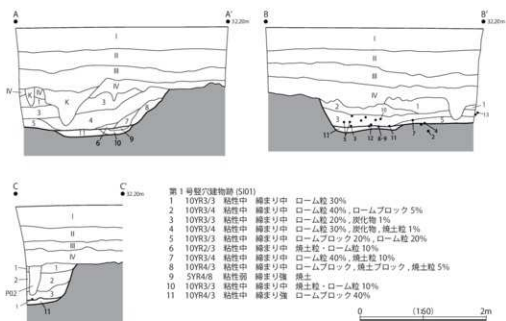
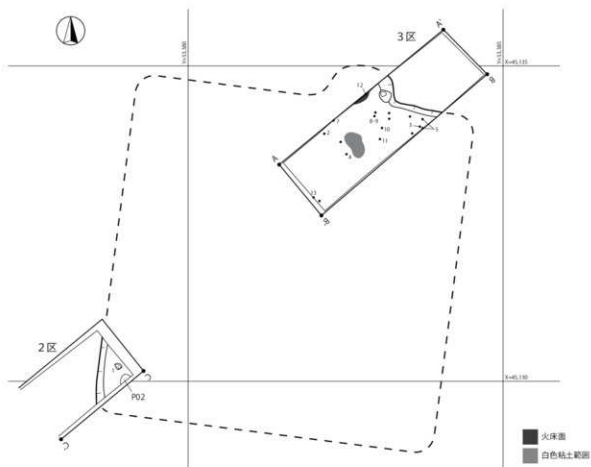
第1号竪穴建物跡 (S101) (第21・22図)

検出位置 2区の北端と3区の南半に位置し、大半が調査区外へ延びており全容は不明である。P02より古い。
規模 北・西壁及び床面、カマドが確認され、推定される大きさは約5.5m、主軸方向はN-4°Eである。
構造 壁の立ち上がりは急で、最大壁高は63cmである。床面はやや凹凸があり、壁際には掘り方が認められる。カマドは北壁に付設される。火床面が壁外に位置し、カマド袖は遺存していない。壁溝や柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

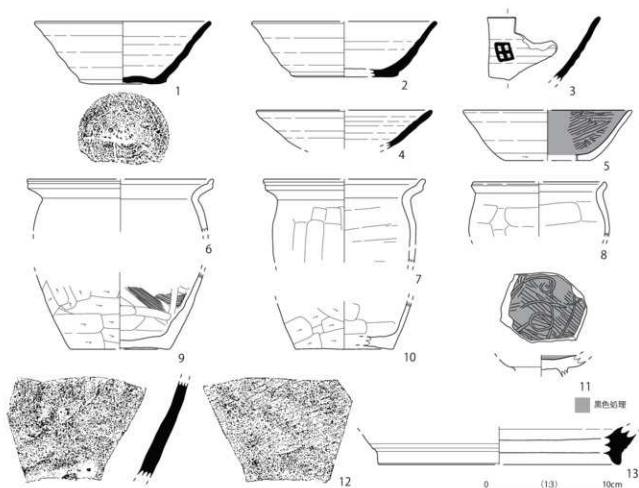
覆土 ローム粒を多量に含む暗褐色土を主体とし、人為的に埋め戻しが行われた可能性がある。また、床面直上からは、44×26cmの範囲で白色粘土ブロックが集中して出土している。

遺物 1～4は須恵器無台坏である。1は体部がハの字状に強く外傾して立ち上がるもので、底部外面は回転ヘラ切り後、底部周縁にヘラナデ調整が施される。2は底部からの立ち上がりが丸みを持つものである。3は体部外面に墨書「田」がみられる。4は体部の傾きが緩やかなものである。5はロクロ成形の土師器坏で、底部外面及び体部下端に回転ヘラケズリが施される。底部外面には墨書が確認できるが、部分的なため判読は不能である。6～8は土師器甕の口縁部である。いずれも口縁端部が上方につまみ上げられるもので、8はつまみ上げが短い。7の内面にはハケメ調整が施される。9・10は土師器甕の底部で体部外面はヘラケズリ、底部外面はヘラナデが施される。9の内面はハケメ後、ナデ調整が施される。11は土師器碗である。内面は横方向のミガキ後に「の」字状のミガキが施される。12は須恵器甕の体部片で、外面は平行線文叩きである。

時期 出土遺物から9世紀前半の廃絶とみられる。



第21図 第1号竪穴建物跡



第22図 第1号竪穴建物跡出土遺物

第18表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

図 版 番	出土地点 ・遺構	器種	法量 (cm)			焼成	胎土 鉱物	海綿 骨針	色調	備考
			口径	底径	器高					
22 1	SH01	須恵器杯	(13.8)	6.8	5.0	やや不具	長石・石英	○	2.5YR7/2 灰黄色	外面: 体部がびびり・底面が粗く切り・底面周縁がびびり 内面: がびびり 木製下底跡産
22 2	SH01	須恵器杯	(14.4)	(8.5)	4.4	良好	長石・石英・珩	○	5Y6/1 灰色	外面: 体部がびびり・底面が粗く切り・底面周縁がびびり 内面: がびびり 木製下底跡産
22 3	SH01	須恵器杯	—	—	—	やや不具	長石・石英・珩 珩	○	10YR5/4 に近い黄褐色	外面: がびびり・珩書「H」 内面: がびびり
22 4	SH01	須恵器杯	(14.0)	—	13.1	良好	長石・石英・珩	○	5Y4/1 灰色	外面: がびびり 内面: がびびり 木製下底跡産
22 5	SH01	土師器杯	(13.4)	(6.8)	4.0	良好	長石・石英・白雲母・赤粒子	○	2.5YR6/4 に近い黄色	外面: がびびり・体部下端が粗く切り・底面周縁がびびり 内面: 黒地埋め焼
22 6	SH01	土師器甕	(14.8)	—	14.2	良好	長石・石英・珩	○	7.5YR4/6 褐色	外面: 口縁部がびびり・体部がびびり 内面: 口縁部がびびり・体部がびびり
22 7	SH01	土師器甕	(12.4)	—	(6.7)	良好	長石・石英・赤粒子	○	7.5YR7/6 褐色	外面: 口縁部がびびり・体部がびびり 内面: 口縁部がびびり・体部がびびり
22 8	SH01	土師器甕	(10.4)	—	13.6	良好	長石・石英・珩 珩	○	7.5YR4/2 灰褐色	外面: 口縁部がびびり・体部がびびり 内面: 口縁部がびびり・体部がびびり
22 9	SH01	土師器甕	—	(7.9)	16.1	良好	長石・石英・赤粒子	○	7.5YR5/8 明褐色	外面: 体部がびびり・底面がびびり 内面: 体部がびびり
22 10	SH01	土師器甕	—	(7.8)	13.8	良好	長石・石英・珩	○	5YR4/4 褐色	外面: 体部がびびり・底面がびびり 内面: 体部がびびり
22 11	SH01	土師器碗	—	—	—	やや不具	長石・石英	○	2.5Y7/3 灰黄色	外面: がびびり 内面: 黒地埋め焼
22 12	SH01	須恵器甕	—	—	—	良好	長石・石英・珩 珩	○	7.5YR5/3 に近い褐色	外面: 平行線文がびびり 内面: 口部がびびり
22 13	SH01	須恵器甕 ・瓶部	—	(19.0)	13.0	良好	長石・石英・珩	○	2.7Y6/2 灰黄色	外面: がびびり 内面: がびびり

第1号掘立柱建物跡 (SB01) (第23・24図)

検出位置 1区の南端に位置する。P01より古い。

規模 柱穴1基のみ確認されたもので、建物跡の全容は不明である。掘り方は、南北1.05m、東西1.04mの隅丸方形で、深さ87cm、柱痕跡は径23cmの円形である。

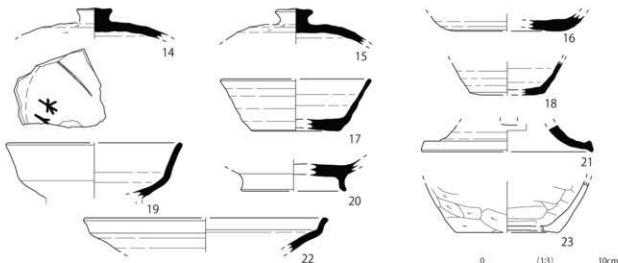
遺物 14・15は須恵器坏蓋である。いずれも摘みが擬宝珠状のもので、体部外面上半には回転ヘラズリが施される。14は体部内面に墨書「体」と、ヘラ書きがみられ、重ね焼きの痕跡が確認できる。16～18は須恵器無台坏である。16は底部外面に手持ちヘラズリが施される。17は底部に厚みがあり、体部が直線的に外傾するものである。19・20は須恵器高台付坏である。19は色調が赤褐色を呈す。21は須恵器高台の脚部である。透かし孔の下端が確認でき、脚部内面には自然軸がみられる。22は須恵器盤で、口縁部が外反気味に立ち上がるものである。23は土師器甕の底部である。

時期 掘り方埋土の出土遺物から8世紀後半以降とみられる。



第23図 第1号掘立柱建物跡

- 第1号掘立柱建物跡 (SB01P1)
- 1 10YR2/3 粘性中 締まり中
ローム粒 20%
 - 2 10YR/4 粘性中 締まり強
ロームブロック 30%、黒色土 20%、
炭化物 1%
 - 3 10YR/4 粘性中 締まり強
ロームブロック 30%、ローム粒 20%
 - 4 10YR/2 粘性中 締まり強
ロームブロック 10%、ローム粒 10%
 - 5 10YR2/3 粘性中 締まり強
ローム粒 20%、ロームブロック 5%、
焼土粒 1%
 - 6 10YR5/8 粘性中 締まり強
黒色土ブロック 40%



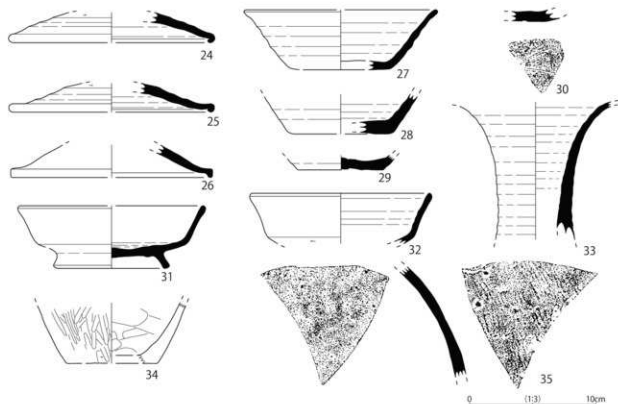
第24図 第1号掘立柱建物跡出土遺物

第19表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版 番号	出土地点 ・遺構	器種	法量 (cm)		焼成	胎土 鉱物	海綿 骨計	色調	備考
			口径	底径					
24 14	SB01P1	須恵器蓋	—	—	12.8	良好	長石・石英・珩+	○	10YR5/2 灰黄褐色 内面: 5Y7/1 灰色・大井部回転ヘラズリ 外面: 5Y7/1 灰色・大井部回転ヘラズリ 内面: 5Y7/1 灰色
24 15	SB01P1	須恵器蓋	—	—	12.5	良好	長石・石英・珩+	○	5Y6/1 灰色 外面: 5Y7/1 灰色・大井部回転ヘラズリ 内面: 5Y7/1 灰色
24 16	SB01P1	須恵器坏	—	8.4	11.2	良好	長石・石英	○	5Y6/1 灰色 外面: 5Y7/1 灰色・底部手持ちヘラズリ 内面: 5Y7/1 灰色
24 17	SB01P1	須恵器坏	(11.8)	(7.0)	4.1	良好	長石・石英・珩+	○	2.5Y6/2 灰黄色 外面: 5Y7/1 灰色・底部回転ヘラズリ未調整 内面: 5Y7/1 灰色
24 18	SB01P1	須恵器坏	—	6.0	12.6	良好	長石・石英・黒色 粒子	○	5Y6/1 灰色 外面: 5Y7/1 灰色・底部ヘラズリ 内面: 5Y7/1 灰色
24 19	SB01P1	須恵器 高台付坏	(13.6)	—	14.4	良好	長石・石英・珩+	○	5YR4/6 赤褐色 外面: 5Y7/1 灰色 内面: 5Y7/1 灰色
24 20	SB01P1	須恵器 高台付坏	—	8.3	12.5	良好	長石・石英・珩+	○	7.5YR5/1 薄灰色 外面: 5Y7/1 灰色・底部回転ヘラズリ未調整 内面: 5Y7/1 灰色
24 21	SB01P1	須恵器高台	—	(13.6)	12.2	良好	長石・石英・黒色 粒子	○	5Y5/1 灰色 外面: 5Y7/1 灰色・透かし孔有・自然軸 内面: 5Y7/1 灰色
24 22	SB01P1	須恵器盤	(19.2)	—	12.2	良好	長石・石英・珩+ ・黒色粒子	○	5Y6/1 灰色 外面: 5Y7/1 灰色 内面: 5Y7/1 灰色
24 23	SB01P1	土師器甕	—	8.2	14.1	良好	長石・石英・白雲 母・赤色粒子	○	7.5YR6/6 褐色 内面: 5Y7/1 灰色

遺構外出土遺物 (第25図)

24～26は須恵器坏蓋で、いずれも摘み部が欠損している。24・25は口縁端部が内側に折り込まれるもので、体部外面上半に回転ヘラケズリ調整が施される。24は体部が内湾気味に開き、25は体部が外反気味に開く。26は体部が外反気味に開き、口縁部が屈曲して短く垂下する。27～30は須恵器無台坏で、27・30の底部にはヘラ書きがみられるが、いずれも小破片のため判読が不可能である。27は体部がへ字状に強く外傾して立ち上がり、口縁部が外反気味である。31・32は須恵器高台付坏である。31は体部下半に稜をもち、直線的に外傾するものである。高台の内面は、貼り付け後の調整が粗雑である。32は体部下半に稜をもち、外反気味に外傾するものである。



第25図 遺構外出土遺物

第20表 遺構外出土遺物観察表

図版番号	出土地点・遺構	器種	法量 (cm)		焼成	胎土・鉱物	海綿骨針	色調	備考	
			口径	底径						器高
25	24	表土 須恵器蓋	(15.8)	—	(2.3)	良好	長石・石英	○	5Y5/1 灰色 外面: 体部270°f・大井部同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	25	表土 須恵器蓋	(15.6)	—	(2.9)	良好	長石・石英	○	5Y6/1 灰色 外面: 体部270°f・大井部同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	26	表土 須恵器蓋	(15.8)	—	(2.6)	良好	長石・石英・黒色 粒子	○	5Y6/1 灰色 外面: 体部270°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	27	表土 須恵器坏	(15.0)	(8.0)	4.8	良好	長石・石英・黒雲 母	○	5Y6/2 灰オウ ズ色 外面: 体部270°f・底部同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	28	表土 須恵器坏	—	(7.6)	(3.2)	良好	長石・石英	○	5Y6/1 灰色 外面: 体部270°f・底部同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	29	表土 須恵器坏	—	6.8	(1.2)	良好	長石・石英・赤 鉄・黒色粒子	○	5Y5/1 灰色 外面: 体部270°f・底部同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	30	表土 須恵器坏	—	—	—	良好	長石・石英	○	5Y6/1 灰色 外面: 底部同軸395°f 内面: 未調整	木製下穴跡産
25	31	表土 須恵器 高台付坏	(14.5)	8.4	4.9	良好	長石・石英	○	5YR4/6 赤褐色 外面: 体部270°f・底部同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	32	表土 須恵器 高台付坏	(14.0)	—	(4.0)	良好	長石・石英・赤 鉄・黒色 粒子	○	5Y6/1 灰色 外面: 体部270°f・体部下端同軸395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	33	表土 須恵器 長頸瓶	—	—	(10.8)	良好	長石・石英	○	5Y5/1 灰色 外面: 270°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	34	表土 土師器 甕	—	(7.2)	(4.7)	良好	長石・石英・黒雲 母	○	5YR6/6 橙 色 外面: 395°f 内面: 270°f	木製下穴跡産
25	35	表土 須恵器 甕	—	—	—	良好	長石・石英・黒色 粒子	○	10C2/1 緑 藍色 外面: 内面:	木製下穴跡産

るものである。33は須恵器長頸壺の頸部である。34は土師器甕の底部片である。体部外面はヘラケズリ後、ミガキ調整が施される。35は須恵器甕の肩部片で、外面には自然軸がみられる。

第21表 溝跡・土坑・ピット観察表

遺構番号	調査区	掘り込み面	平面形態	断面形態	確認長 (cm)	幅 (cm)	確認面からの深さ (cm)	底面標高 (m)	出土遺物	備考
SD01	1区	V層上面	—	逆台形状	(45)	33	6	30.94	—	北端が逆台状に落ち込む
遺構番号	調査区	掘り込み面	平面形態	断面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	確認面からの深さ (cm)	底面標高 (m)	出土遺物	備考
SK01	2区	VI層上面	不整形	弧状	85	(66)	25	30.61	—	
P01	1区	SB01P1上面	円形	階段状	39	36	31	30.64	—	SB01P1より新しい
P02	2区	V層上面	(円形)	U字状	19	(9)	46	30.59	—	SI01より新しい
P03	3区	V層上面	(円形)	U字状	23	(15)	12	30.84	—	
P04	4区	IV層上面	(円形)	U字状	50	(26)	17	30.79	—	
P05	2区	IV層上面	(円形)	U字状	16	—	7	30.87	—	
P06	1区	—	円形	U字状	38	36	59	30.04	—	
P07	1区	—	円形	U字状	47	45	23	30.34	—	
P08	1区	V層上面	(円形)	U字状	39	(26)	7	30.50	—	
P09	1区	V層上面	(円形)	弧状	30	(24)	8	30.55	—	
P10	3区	—	—	U字状	33	29	21	30.69	—	

第22表 第29地点出土遺物総量

出土地点	1区表土			SI01			SB01P1			P01			総点数	総重量 (g)	
	出土遺物	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数			重量 (g)
土師器	坪	1	1	3.9	4	3	37.3	1	1	3.8				6	45.0
	高台付坪							1	1	7.9				1	7.9
	椀				1	1	45.0							1	45.0
	甕	29	29	339.9	12	12	371.7	4	4	112.6				45	824.2
	小計	30	30	343.8	17	16	454.0	6	6	124.3				53	922.1
須恵器	坪	35	35	335.7	4	4	204.0	14	14	245.4				53	785.1
	高台付坪	1	1	181.3				2	2	71.4				3	252.7
	蓋	17	17	241.7	1	1	12.5	3	3	98.9				21	353.1
	皿				1	1	21.4							1	21.4
	高杯							2	1	34.5				2	34.5
	甕							1	1	27.9				1	27.9
	甕	8	8	165.3	4	4	200.6	5	5	80.9	1	1	7.3	18	454.1
	壺・甕類	3	2	135.4	1	1	40.1							4	184.5
	小計	64	63	1,050.4	11	11	487.6	27	26	550.0	1	1	7.3	103	2,113.3
	総計	94	93	1,403.2	28	27	941.6	33	32	683.3	1	1	7.3	156	3,035.4

4 総括

ここでは、第1号竪穴建物跡と第1号掘立柱建物跡の出土遺物について帰属時期を比定し、各遺構の造営・廃絶時期について検討する。また、これまでの調査で検出された遺構との関係について考えてみたい。

第1号竪穴建物跡 (SI01) 須恵器無台坪・皿・甕・壺類、土師器坪・椀・甕が出土している。1は、床面直上から出土した須恵器無台坪である。体部がハの字状に強く外傾して立ち上がるもので、底径指数が49.3、器高指数36.2である。佐々木義則は、木葉下窓跡産坪A1を法量により1～7類に分類し、その形態変化及び生産年代を検討している (佐々木1995)。これに拠れば、底径指数が46.5～50.4、器高指数31.9～41.7のものは5類とされ、9世紀第1四半期から第2四半期に位置づけられている。2は、掘り方直土から出土した須恵器無台坪である。底部からの立ち上がりかや丸みを持つもので、底径指数59.0、器高指数30.6である。佐々木義則の木葉下窓

跡群編年3類に分類され、8世紀第3四半期から第4四半期に位置づけられる(佐々木1995)。5は、ロクロ成形の土師器環で、内面が黒色処理される。体部下端に回転ヘラケズリが施されるものである。佐々木に拠れば、体部下端・底部回転ヘラケズリされるものは、9世紀前半から10世紀前半にかけて存在し、9世紀後半に中心があるとされている(佐々木1998)。

第1号竪穴建物跡の出土遺物は、大半が破片資料で一括廃棄などが認められない。このため、廃絶時期を限定することはできないが、人為的に埋め戻されている可能性が高い覆土から、9世紀代中頃から後半のものが確認できる。また、掘り方埋土からの出土遺物は、8世紀第3四半期から4四半期のものである。以上のことから、8世紀後半以降に造営され、9世紀前半には廃絶していたものとみられる。

第1号掘立柱建物跡(SB01) 須恵器蓋・無台坏・高台付坏・高坏・盤、土師器坏・高台付坏・甕が出土している。14・15は、須恵器坏蓋である。いずれも摘みが擬宝珠状で、高台付坏と組み合わさる蓋と考えられる。須恵器坏蓋は浅井編年のⅢ期からⅤ期に認められ(浅井1991)、木葉下窯跡群TC5段階で、ほぼすべての摘みが、全体に高く径の小さい擬宝珠状のものになるとされている(佐々木1989)。摘みや天井部の形態から、8世紀第3四半期から9世紀前半代の年代が与えられる。16～18は、須恵器無台坏である。16は、底部からの立ち上がりと底部調整から、8世紀後半代のものと考えられる。17は、底径指数59.3、器高指数34.7である。佐々木の木葉下窯跡群編年3類に分類され、8世紀第3四半期から第4四半期に位置づけられる(佐々木1995)。19・20は須恵器高台付坏である。全体の器形がわかるものはないが、高台付坏は浅井編年Ⅱ期に出現し、Ⅴ期を最後に消滅するとされている(浅井1993)。瀧美賢吾は木葉下窯跡群における編年上の画期を設定し、高台器種が安定的に生産される段階をⅢa期とし、その年代を8世紀第3四半期初めから8世紀第4四半期後半としている(瀧美2005)。また、製作技法と形態変化についてもふれ、高台器種の初現段階にあたるⅡb期TE3号窯跡段階と安定的生産段階のⅢa期TE4号窯跡段階では、やや異なることを指摘している。19・20は、TE3号窯跡段階の高台付坏とは様相が異なり、高台器種の初現段階までは遡らないものとみられ、8世紀後半代のもと考えられる。21は、須恵器高坏の脚部である。浅井編年のⅢ期に出現し、Ⅴ期を最後に消滅するとされている(浅井1993)。木葉下窯跡群では、TE4段階に出現し(佐々木1997)、TC5段階で安定的生産が認められる(瀧美2005)。22は、須恵器盤の口縁部である。盤は浅井編年のⅡ期に出現し、Ⅵ期を最後に消滅するとされている(浅井1993)。木葉下窯跡群では、TE3段階以後に出現し、TE4段階で定量生産されるとしている(佐々木1997)。今回、柱穴掘り方埋土から、高坏と盤が揃って出土していることから、器種組成に定量含まれるTECS段階以降の可能性が高く、8世紀後半代から9世紀中葉の年代が与えられる。

第1号掘立柱建物跡の出土遺物は、福属時期を限定できるものが少ないが、8世紀後半代を中心とするものが柱穴掘り方埋土から出土しており、8世紀後半以降に造営されたものとした。

堀遺跡では、これまでの調査で8～9世紀代の竪穴建物跡が多数検出されている。特に第1・2・4地点では、総数40軒もの竪穴建物跡が検出されている。第2地点では大小8軒の竪穴建物跡からなるグループの存在が認められ、集落を形成する単位集団が想定されている。また、竪穴建物跡の規模は、40～50㎡の大型、15～25㎡の中型、10㎡程度の小型、さらに5～7㎡と小型化するものが存在するとされている(井上・千葉1995)。第29地点の調査では、調査面積の関係から竪穴建物跡のまよりは確認できないが、第1号竪穴建物跡の規模は、概ね中型のものに相当し、当該期の竪穴建物跡の広がりを確認することができた。

第29地点の西に位置する第4地点の第5号掘立柱建物跡は、長舎風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性が指摘されている(櫻村1995)。今回の調査で検出された第1号掘立柱建物跡は、8世紀後半代以降に造営されたものである。調査面積の関係から全容は不明であるが、柱穴掘り方の形状から、第5号掘立柱建物跡と同様の公的な建物跡の可能性があり、周辺に建物群が存在することが想定される。堀遺跡は、那賀部面の造営や修造などに関わった計画村落である可能性が指摘されているため、今後は、このような建物群について、その性格や位置づけを検証する必要がある。(小川)

引用・参考文献

- 浅井哲也 1991 「那珂台地及びその周辺における奈良・平安時代の土器について」『年報』10 茨城県教育財団
- 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)」『研究ノート』副刊号 茨城県教育財団
- 1993 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)」『研究ノート』2号 茨城県教育財団
- 源美賢吾 2005 「木葉下窯跡群における須恵器生産の変化と画期」『筑波大学先史学・考古学研究』第16号
- 源美賢吾・川口武彦 2011 「台渡里3—平成19～21年度長者山地区範囲確認調査概報—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第37集 水戸市教育委員会
- 伊東重敏 1975 「常陸考古学研究所報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷庵寺跡出土土瓦雑考」常陸考古学研究所
- 伊藤廉倫 1995 「茨城県水戸市 堀道跡—住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市教育委員会
- 井上義安・千葉隆司ほか 1995 「水戸市堀道跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市堀道跡発掘調査会
- 井上義安・藤沼香未由ほか 1999 「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版」水戸市教育委員会
- 茨城県教育委員会 2000 「茨城県道跡地図」
- 小川和博・大淵淳志ほか 2006 「台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第5集 水戸市教育委員会
- 榎村宜行 1993a 『(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石道跡』茨城県教育財団
- 1993b 「白石道跡で検出された遺構について」『研究ノート』第2号 茨城県教育財団
- 2005 「堀道跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡を中心として—』茨城県考古学協会
- 川口武彦・関口慶久ほか 2007 「平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書」水戸市埋蔵文化財調査報告書第11集 水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子ほか 2009 「平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書」水戸市埋蔵文化財調査報告書第22集 水戸市教育委員会
- 2011 「台渡里4—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里第64次)—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第38集 水戸市教育委員会
- 川口武彦・小松崎博一ほか 2005 「台渡里庵寺跡—範囲確認調査報告書—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第1集 水戸市教育委員会
- 川口武彦・源美賢吾ほか 2009 「台渡里1—平成18年度長者山地区範囲確認調査概報—」第21集 水戸市教育委員会
- 瓦吹 堅 1991 「水戸市台渡里庵寺跡Ⅲ—観音堂山・南方・長者山地区の性格について—」『婆良岐考古』第13号 婆良岐考古同人会
- 本木雅康 2008 「遺跡からみた古代の駅家」山川出版社
- 黒澤彰哉 1998 「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』第25号 茨城県立歴史館
- 大橋 生・佐々木藤雄ほか 2006 「台渡里庵寺跡 一市道常磐17号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第4集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・川口武彦ほか 2007 「アラヤ道跡(第2地点)一市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第12集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・林邦雄ほか 2008 「台渡里道跡(第39次調査)一公共下水道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市埋蔵文化財調査報告書第15集 水戸市教育委員会
- 佐々木義則 1989 「木葉下窯跡群出土杯・盤類の法量分化について」『婆良岐考古』第11号 婆良岐考古同人会
- 1995 「木葉下窯跡群産土杯A1の変化について—消費地における形態と調整技法の様相—」『婆良岐考古』第17号 婆良岐考古同人会
- 1997 「木葉下窯跡群の須恵器生産—奈良時代前半を中心に—」『婆良岐考古』第19号 婆良岐考古同人会
- 1998 「常陸におけるロクロ成形土師器の展開—古代久慈・那賀・信太の三部を中心として—」『婆良岐考古』第20号 婆良岐考古同人会
- 1999 「茨城北半部における土師器碗の形式変遷」『婆良岐考古』第21号 婆良岐考古同人会
- 高井棟三郎 1964 「常陸台渡庵寺跡・下総結城八幡瓦窯跡」綜芸舎
- 藤沼香未由・川口武彦ほか 2004 「台渡里庵寺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市教育委員会
- 奥山泰久 1993 「アラヤ前遺跡(水戸市渡里町)をめぐって」『常陸の歴史』第13号 斎書房
- 渡辺俊夫 1981 「第5章 砂川道跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 宮部道跡・鹿の子A道跡・砂川道跡』財団法人茨城県教育財団

水戸市埋蔵文化財調査報告第44集

台渡里6

公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第81次・堀遺跡第29地点）

印刷 平成23年7月15日

発行 平成23年7月15日

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-8610 茨城県水戸市中央1丁目4番1号

TEL：029-224-1111（代）

印刷 細谷印刷有限公司

〒372-0031 群馬県伊勢崎市今泉町2丁目939番地5

TEL：0270-25-0193

写真図版



調査区完掘全景（南から）



基本土層（東から）



SX01 検出状況（南西から）



SX01 土層断面（北西から）



SX01 土層断面（南から）



SD01 土層断面 (南東から)



SE01 完掘状況 (東から)



SE01 軒丸瓦土状況 (南東から)



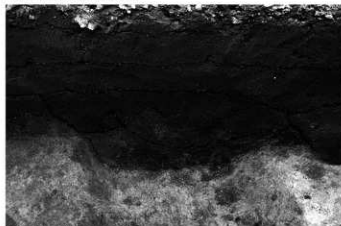
SK01 完掘状況 (南から)



SK02 骨出土状況 (西から)



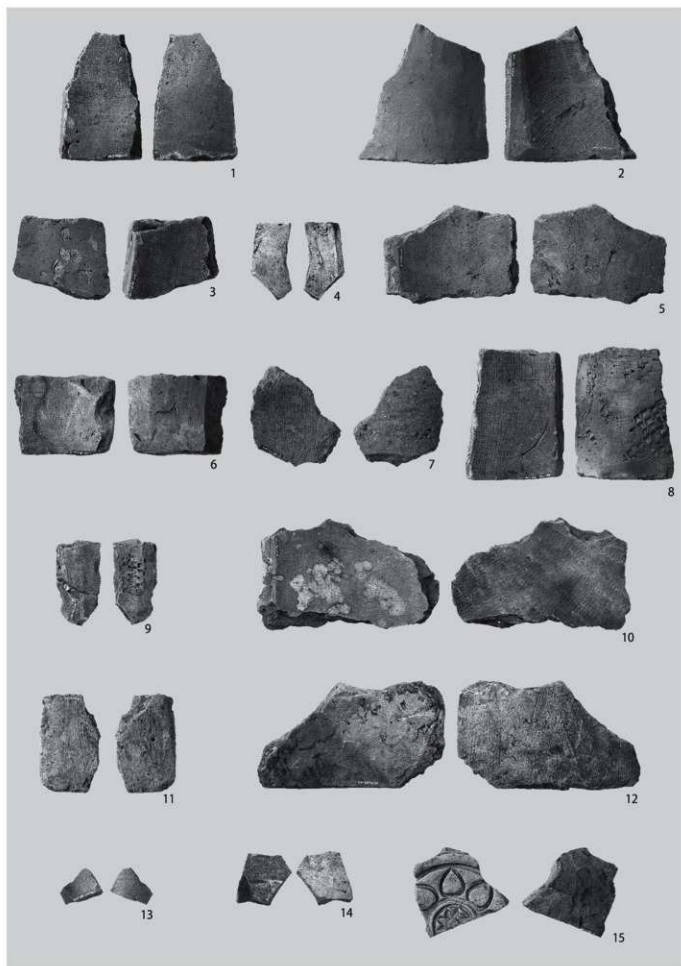
SK03 完掘状況 (西から)



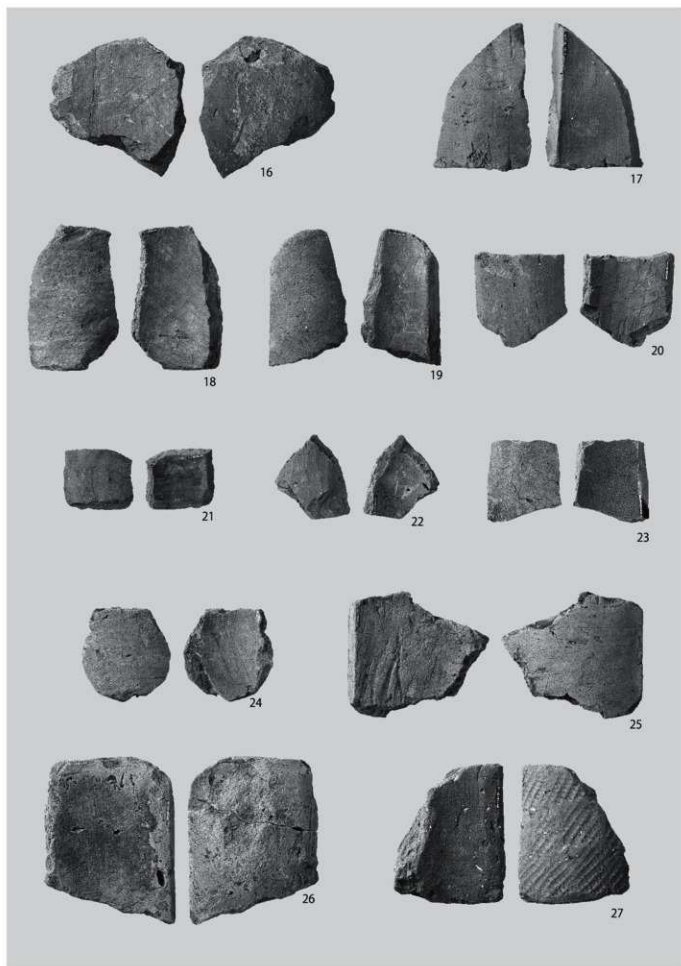
SK04 完掘状況 (東から)



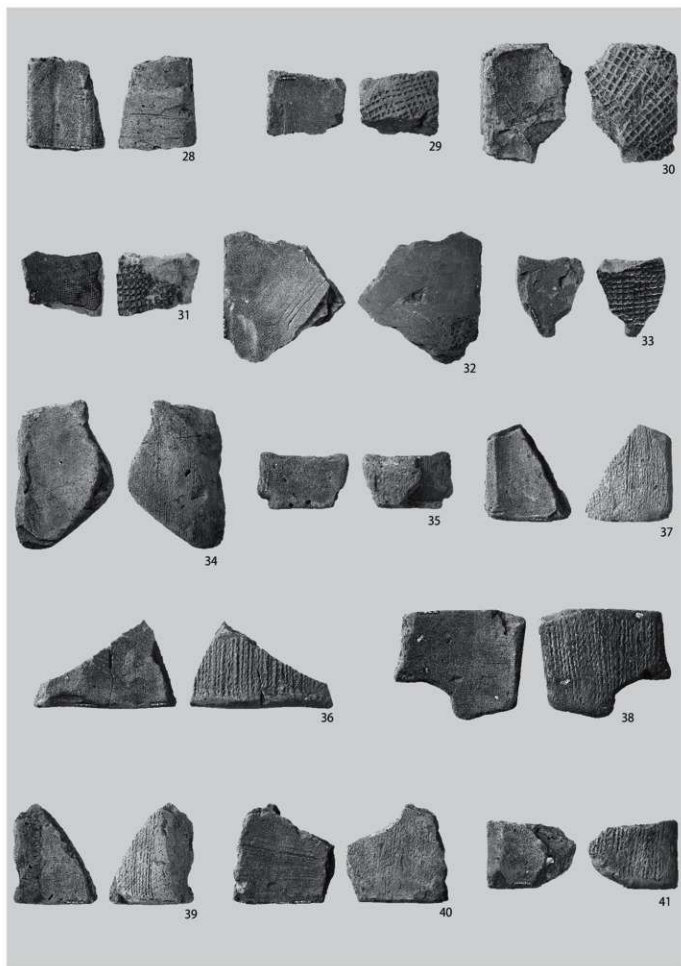
SK05 完掘状況 (北西から)



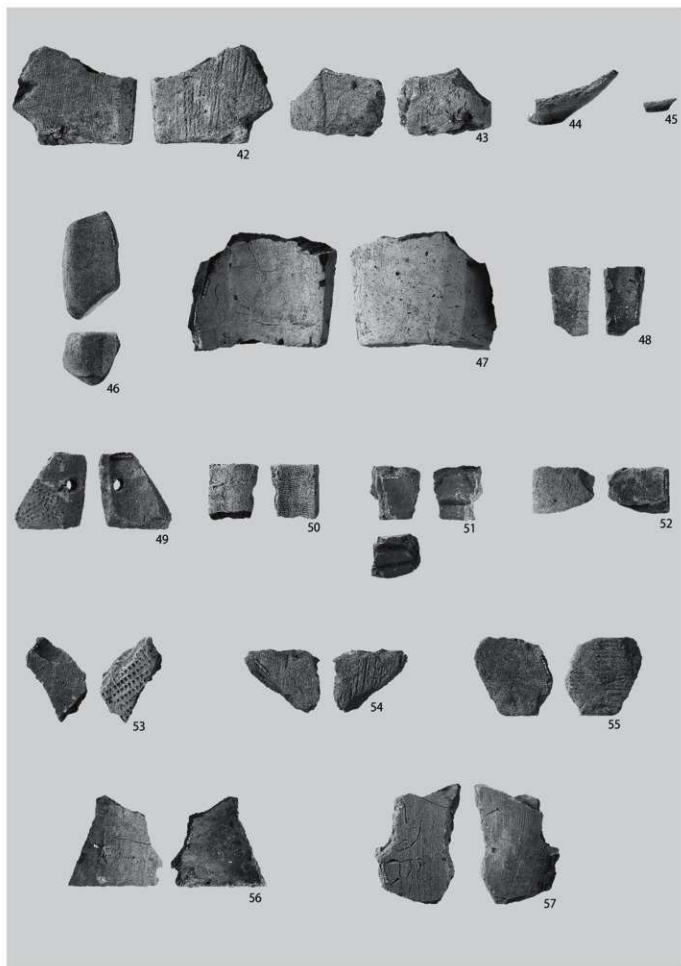
第1号溝跡出土遺物・第1号井戸跡出土遺物（1）



第 1 号井戸跡出土遺物 (2)



第1号井戸跡出土遺物（3）



第 1 号井戸跡出土遺物（4）・土坑出土遺物・遺構外出土遺物



1 区完掘全景 (南西から)



2 区完掘全景 (北東から)



3 区完掘全景 (南西から)



基本土層 (北西から)



S101 床面完掘 (南から)



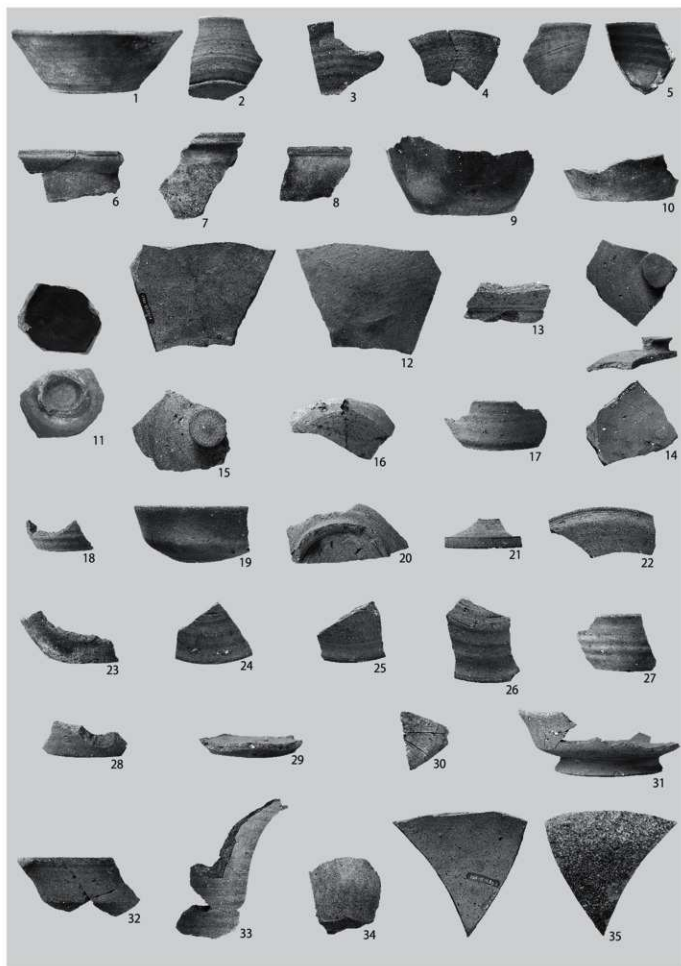
S101 カマド土層断面 (南から)



S101 No. 1 遺物出土状況 (南西から)



S101P1 土層断面 (東から)



第1号竖穴建物跡出土遺物・第1号掘立柱建物跡出土遺物・遺構外出土遺物

水戸市埋蔵文化財調査報告第44集

台渡里6

公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第81次・堀遺跡第29地点）

印刷 平成23年7月15日

発行 平成23年7月15日

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-8610 茨城県水戸市中央1丁目4番1号

TEL：029-224-1111（代）

印刷 細谷印刷有限公司

〒372-0031 群馬県伊勢崎市今泉町2丁目939番地5

TEL：0270-25-0193

